白と黒の物語

草日真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白と黒の物語

【Ｎコード】
Ｎ５６２２Ｓ

【作者名】
草日真

【あらすじ】
童話から始まる異能バトルもの小説。

この物語は、決闘によって欲しいものが手に入る国、ロベリアでの物語。

人々の人生が、童話として語り継がれている『印章』を巡って交錯し、『心術』という心に作用する力を用いて戦う物語です。

印章の男の物語（前書き）

印章の男の物語は、黒と白の物語の一部として書き上げた作品です。

けれども、単体でも童話調の物語として成り立っています。

ですので、もしもちょっと読んでみようかなーとお考えの方がいらっしゃったなら、是非とも『印章の男の物語』だけでも、読んでみて下さい。

印章の男の物語

「さあ、こんばんも、絵本を読んであげよう」
父は娘に優しく語りかけました。
「ありがとう。おとうさま」
娘はとても喜んで父の元へと、かけよりました。

それはとある月の夜。
枕元で父親が娘のために読んだ物語。
この国でとても有名なお伽噺です。

ある国に一人の男がおりました。
男はひょろりとしていて力が弱く、いつも誰かにいじめられておりました。
さらにその上その国では、欲しいものを決闘で手にいれるという決まりまでもが、ありました。
そのために、弱い男はいつもいつも、食うにもこまる生活を送っていました。
男は今日も川へと水をくみに向かいます。
「私は今日明日にでも、死んでしまうに違いない」水面に映った傷だらけの身体をみて、男はぽつりと呟きました。
そんなとき男に語りかける一人の娘がありました。年若く、それはそれは美しい娘でした。
「あなたの身体はどうしてそんなに傷だらけなの？」
娘はむじゃきに聞きました。
「私はとても力が弱いのです。どれだけ必死に働いてお金や食べ物を手に入れても、すぐに決闘を挑まれて奪われてしまうのです」男

は涙ながらに語りました。
「まぁ、なんて可哀そうなのでしょう。一生懸命働いても、報われない世の中なんておかしいわ」
男のなげきに娘はとても、いきどおりました。
「しかし、それが世の中というものです。あなたも私などと話していてはいけません。早く自分の家に帰るべきです」男は娘の身を案じて言いました。
男はこう考えていたのです。
もし、この娘さんと話している所を誰かに見られていて、娘を賭けて決闘を申し込まれたりなどすると一大事。この娘さんの人生を大きく狂わせてしまうかもしれない。

しかし娘は去りません。
その上、娘はとても信じられないようなことを言い始めました。
「あなたの優しさに感動したわ。あなたの願いごとを一つだけ叶えてあげましょう」
願い事を叶えてくれるだって。そんなことがある訳はない。
男は当然、そのように思いました。
「願い事を叶えてくれるだって。そんなことがある訳はない」娘は得意げに言いました。
男はとても驚きました。

そして、思いました。
どうして私の考えていることを？
「どうして私の考えていることを？」
娘は得意げに続けました。
「あなたは何ものなのですか？」男は心底不思議に思って質問しました。
「わたしは魔法使いなの。この辺りでは珍しかったかしら」娘は胸をはって得意げに答えました。

珍しいなんてものではありません。男は魔法使いなど、生まれてこのかた見たこともありませんでした。

魔法使いなんて本当にいるのか？　男は心の中で思いました。

「まだ信じてくれないなんて、強情な方なのね」娘は口をすぼめて言いました。

「いや信じるさ」

これほどまでに完全に心を読めてしまうのです。この娘が魔法使いでないのなら、なんだと言うのでしょう。

男は娘の言うことを信じることに決めました。

「そう。ならいいわ。あなたの願いごとを叶えてあげる」

男は願ってもないことだと喜びました。力が弱くずっと決闘に負け続け、働いて手に入れた少しのお金も食べ物も奪われ続けていたのですから当然です。

すぐさま男は娘に願いました。

「私にも決闘で勝てるようにして下さい！」

「あら、そんな願いごとでいいのかしら。無欲なかたね。あなたは願えば、一生決闘しなくてすむ程のお金を手に入れることも出来るというのに」男は娘の言葉にはっとなりました。

そうか、なるほど。

大金持ちにしてくれと願えば、大金持ちにもなれるのか。

確かに大金持ちや、身分の高い貴族は、自分の代わりに強い決闘者を雇って戦わせています。しかし、大金持ちになったことのない男は、大金持ちになりたいなどと言う願いがあるなど夢にも思わなかったのです。

「もう少し、考えさせて下さい」

「いいわ。待ちましょう、いつまでも」

暫く考えたのちに、男は娘に願いました。

「私を貧しい暮らしをしなくてすむように、大金持ちにして下さい

！」
「あら、そんな願いごとでいいのかしら。無欲なかたね。あなたは願えば、この国の王様にもなれるというのに」
男は娘の言葉にはっとなりました。

そうか、なるほど。
王様にしてくれと願えば、王様にもなれるのか。
いつも地道に下仕事ばかりしていた男には、王様になりたいなどと言う願いがあるなど夢にも思わなかったのです。
「もう少し、考えさせて下さい」
「いいわ。待ちましょう、いつまでも」
娘はそう言ってくれるものの、何度も待たせるのは悪いような気がしていました。男は一生懸命考えました。
今までの人生で使ったことのないほど頭を使い、答えを一つ、出しました。
「私をどんな人間にも勝てるようにして下さい！」
「そう。わかったわ」
今度は娘も尋ね返しませんでした。
男がどれほど考え抜いたものなのか、娘にもわかっていたからです。
「では、あなたに、絶対に決闘に勝てる印章を授けましょう」
娘は河原から親指ぐらいの大きさのきれいな小石を拾いあげました。
懐から取り出した木の棒をひとふり。小石は見る間に、たくましい鷹の刻まれた、それはそれはきれいな印章へと変わりました。
「おお。ありがとうございます」男は大喜びになって、娘に手を伸ばしました。
けれども、娘は印章をその手のひらに抱えたまま。男に渡そうとはいたしません。
「あなたにこの印章を差し上げます。けれども、その前に約束して

頂きたいことがあるのです」娘は意味深に言いました。
やっぱりこんなにうまい話があるわけはない。
このまま受け取っていれば、神話に出てくる道化のように魂を奪われてしまうに違いない。男はうろたえました。
けれども娘はかまわずに、唄うように続けました。
「あなたに守って貰いたいことは三つだけ。

「一つ、自分から決闘を挑んではならないということ――
「二つ、挑まれた決闘は絶対に受けなければならないということ――
「三つ、絶対に印章を手放してはならないということ――

「――この三つです。もしもこの三つの決まりを破ったとしたなら、あなたに大きな災いが降り注ぐでしょう。絶対に破らないと約束して頂けるかしら」

「約束しましょう」
そんなことならかまわないと、男は一も二も無く、その印章を受け取りました。
「これであなたは、その印章を身につけているかぎり、絶対に負けません。それでは、またいつの日か――」娘は川の向こうに消え入るように去って行きました。
男はしばらくの間、ぼうぜんと立ちつくしていました。
けれども、自分のお腹の音ではっと我にかえって思いました。

今日の分の仕事をしなければ。
いくら決闘に勝てたとしても、食べるものが無ければ死んでしまう。
男は川から水をくみ。いつものように仕事へと向かいました。
けれども、いつもと違って気分は晴れやかです。
だってもう決闘で食べ物を奪われることも、お金を奪われること

もないのですから。
たしかに大金持ちや王様に魅力を感じなかったと言えば嘘になりますが、男にとってはそれ以上に、一度でいいから決闘で勝ってみたいという思いのほうが強かったのです。
しかし、一回決闘に勝てるだけでは、ご飯が食べられず路頭に迷い、死んでしまうかもしれないと男は思いました。
だから少し欲を出して、どんな人間でも勝てるようにと願ったのです。今までの仕打ちを考えるなら、このくらいの欲は許されるだろうとも考えました。
印章を身につけても、とくに力が強くなったようには感じませんでした。
けれども、男はその印章の力を信じてうたがいませんでした。
そして、決闘を申し込まれないかなと思いながら仕事場のお屋敷へと向かいました。
いつも嫌だと思っている決闘が楽しみになるなんて、思ってもみなかったと男は心の中で笑いました。

晴れ晴れとした気持ちで仕事にはげむものですから、その日の男の仕事はそれはもう、はかどりました。雇い主の屋敷執事も目を丸くしたほどです。
そしてその日、男はいつもよりも多くのお金を受け取りました。
それをよく思わないのは仕事仲間のひげの男。
彼はいつも男に決闘を申し込み、男からお金を巻きあげていました。
ひげの男は自分よりも弱い男が自分よりも多くのお金を受け取るのが許せなかったのです。
「なあ、やけに景気が良さそうじゃないか」ひげの男は印章の男に話しかけました。
印章の男は、しめたと思いました。
だって、これで本当に自分が決闘で勝てるのかを確かめることが

出来るのですから。
ひげの男が印章の男に今日稼いだお金を賭けて決闘を申し込みました。
もちろん、印章の男は勝ちました。
それを見たものたちは、次々と印章の男へと決闘を申し込みました。
だって、印章の男はひょろっとしていて、とても弱そうに見えたのですから。
ちょっとこづきたおすだけで二日分のお金が手に入ると思えばこれほどおいしい話はない。
そう考えて、いろんな男がこぞって印章の男に挑戦しました。
もちろん、印章の男は全ての決闘に勝利しました。
「ああ、なるほどこれは気味がいい」
まるで、今までの苦労が嘘のよう。
味をしめた印章の男は働くのもやめて毎日毎日、戦いに明けくれました。

いつしか印章の男は最強の男と呼ばれ、多くの武勲を立てました。
それでも争いは絶えません。
男を倒して名を上げようと、多くのものが印章の男へと決闘を挑みました。
男は今か今かと、敵の挑戦を楽しみにしていました。
そして、みずから相手に決闘を挑めないことを、とても歯がゆく感じていました。

それから何年か経ったある日のことです。
男に印章を与えた魔法使いが、男の前にまた現れました。
なんと男に決闘を挑んできたのです。
男はとても喜びました。
これで、魔法使いの持つもっと良い道具が手に入る。

そうすれば、もっと胸のすく思いができるに違いない。

そんな男に魔法使いの娘は静かに言いました。

「あなたに決闘を申し込むわ。――もしも私が負けたなら、あなたの全てを私に寄こしなさいな」

男は勝負を断れず、印章によって勝利して、全てを失ってしまいましたとさ。

印章の男の物語（後書き）

私の物語を読んで下さって本当にありがとうございます。

この物語は白と黒の物語の一部であり、今後物語は印章を巡る、特殊な力の持ち主たちの戦いへと進んで行きます。

結末を迎えるまで、温かい目で見守って頂けると嬉しいです。

プロローグ

白と黒の物語。
これは、とある国に伝わる物語。
賭争によって全てが決まる。
そんな国の物語。
賭争とは強い人間の為の法律。
屈強な男が敵を排除し、全てを手に入れる。
――これが世界の法則だった。

賭争とはお互いがお互いに、何かを賭して戦う決闘。
勝者は手に入れ、敗者はただ奪われる。
すなわち強者が生き、弱者が死ぬ、本当に解りやすい弱肉強食の法則。
その法則に則って数多の強者が全てを手に入れた。
しかし、時代の流れの中に、まるで一つの泡のように不思議な存在が浮かび始めた。
変化は、とある女が屈強な偉丈夫に賭争を挑んだことから始まる。

「私と賭争して」

男にとってそれは甘い餌だった。
男が負けるはずのない賭争。
か弱い女が屈強な男に戦いで勝てないのは自明の理。
もちろん男は賭争を受けた。受けると同時に倒れた。倒れて、それでおしまい。
その女は賭争に勝利した。自明の理が覆った瞬間だった。
彼女には力があったのだ。
彼女が言うにはその力とは、相手の心を挫くというもの。

そして、彼女は世界を変えた。

――いや、厳密には彼女が変えたわけではない。
彼女のような者が次々と現れ、賭争の概念すら変わったのだ。
その力は心術と呼ばれ、いつの間にか広まった。
心の力なきものに未来はない。
しかし、窮地に立たされた人間はときとして巨大な力を発する。
心の力なきものは、生活に不自由し、生への執着心に目覚め、凄まじい力を発揮し、賭争に勝利するようになる。
また、賭争に勝利し、全てを手に入れたものは、物事に対する執着心を無くし、足元をすくわれる。
それはまるで時代と言う名の急流の中で生まれては消える泡のように。

ここは力が生まれてから、数年の月日が経過した世界。
未だにその力がなんであるか、皆が手探り状態である黎明の期。
圧倒的強者の存在しない現状。
王都ロベリアでは日夜、覇権争いが行われている。
物語の始まるのは、そんな世界。

それは夕日に染まる頃。
煉瓦と灰漆喰に包まれた、石の街。
風が冷たい季節の出来事だった。

黒い男の物語

ある日、ある時、ある国の、暗い夜道を黒い男が、とぼとぼと歩いておりました。

その男は、まるで隠者のように頭の先から足の先まで真っ黒なローブを身に纏い、肩を落として歩いておりました。

フードの奥から覗く、その顔は長く伸びた黒檀のような髪の毛で覆い隠されています。

外からはその表情を伺い知ることもできません。

彼には明日がありませんでした。

本当に明日が来ないわけではありません。

ただ、未来のことを考えると、とても憂鬱になってしまうのです。

「今日を生きても意味はない。明日があっても意味はない」

彼はいつものように呟きました。

貴族で賭争に強く大金持ちだった彼の両親は、彼が物心ついた頃に亡くなり、それからというもの彼はずっと一人で暮らしていました。賭争を挑まれると、また色々なものを奪われる。そう考えた彼は出来るだけ家から出ずに生活していました。ひっそりと夜の闇に溶け込むように。

だけど、その生活も、もうすぐ終わり。

もうそろそろ親の財産も尽きかけていました。

しかし、彼にはもはや生きる気力も消え失せてしまっていたのです。

「なるようにはなる。ならないようにしかならない」

彼はまたいつものように呟きました。

そうして彼はいつものように月に一度の食料の買い出しに向かいました。
これが最後の買い出しでした。

その帰り道。
彼はまた、いつものように呟きます。
「これで終わり。これで終わり。この食料が尽きれば眠るように終わろう」自らの終焉を受け入れた黒い男。
そんな彼に話しかける一人の娘がありました。その娘は唄うように問いかけます。

「終わると言うのは勿体ないわ。どうしてそんな事をおっしゃるの？」

黒い男は酔狂な人がいるものだと思いました。
それもそのはず、その娘は真っ白なドレスを着込んでいたのです。その上、顔も髪も指先も染め抜いたように真っ白。一点の曇りもない、透き通った白さの娘でした。

真っ黒な自分に話しかける真っ白な娘。黒い男は白い娘に少しだけ興味を持ちました。そして話を、してみることにしたのです。
「俺にはもう何もない。明日も未来も何もない」黒い男は言いました。
「そんな事はないわ。立派な身体があるじゃない」白い娘は言いました。
「身体などあってもなくても同じこと。俺にはもう、心がない」黒い男は静かに語りました。
「本当に何もないというのなら、私について来て下さらない？」急に娘が請いました。

黒い男はどうしたものかと悩みました。なにせ得体のしれない娘です。
ついて行ってどんな目に遭うかもわかりません。
白い娘は熱心に頼みます。
とうとう黒い男は娘の言った「本当に何もないのなら黙ってついて来て下さるでしょうに」という言葉を聞いて、白い娘と一緒についていて行くことに決めました。
「何かあっても何もない。何があっても変わらない。俺には本当に何もないのだから、何があっても構わない」
黒い男は誰にも聞こえないように、また小さな声で呟きました。

道中で、白い娘が尋ねました。
「あなたはどうしてそんなに黒いのかしら？」
黒い男は答えました。
「それはカラスと同じ理由だろう」
白い娘はくすりと笑いました。
そして白い娘はまた尋ねました。
「あなたの周りは、どうしてそんなに黒いの？」
黒い男には言葉の意味が、全くわかりませんでした。
「周りが黒い？　どう言う事だ？」
黒い男は素直に聞きました。
「あら。あなたは気づいていないのね。あなたが黒く覆われていることに」
白い娘は意外そうに、聞き返しました。
黒い男はその白い娘の言葉を聞いて、昔の事を思い出しました。

それは黒い男が両親を亡くしてから数年経ったときのこと。
黒い男が一人の生活に慣れきった頃のことでした。
その頃、黒い男はまだ黒くなく、男というよりはまだ幼い少年という年頃でした。

両親が亡くなった際に、財の多くは親戚に持っていかれてしまい、その少年は一人で大きなお屋敷に住んでいました。
冬は寒さに凍え。夏は風の音に怯え。寂しさに震えながら過ごしていました。
彼を助けてくれる者はどこにもありませんでした。
そんなある日。
ふと彼は自分が妙なことに気づきました。今日は寂しくないのです。
いつもは呼吸をするように寂しいと思い続けていた彼のことです。それは何処か不自然で違和感があります。けれども、何が起こったのかは解りませんでした。
次の日もその次の日も彼は寂しいと思いませんでした。
心の隅で少しでも寂しいと思うと、胸の真ん中にその気持ちが吸い込まれていくようなのです。
なんでだろう。
彼は不思議に思いました。
けれども、いつも一人の彼にとって、寂しいと思わないことは悪い事ではありませんでした。それからの彼は家鳴りに怯えることもなく、淡々と生きていきました。
それから数年経ったある日。
彼は自分の胸の真ん中に、両手で包めるぐらいの大きさの、黒い塊がある事に気付きました。
なんだろう。その塊はとても不思議な塊でした。塊といっていいものなのかもわかりません。穴といったほうがよいのかもしれません。指で触ろうとしてもすり抜けてしまいます。握ってみても、なんの感触もありません。
けれども彼には解るのです。この塊が確かに存在することに。
彼は感情が昂ると、その感情が黒い塊の中に吸い込まれていくのを感じました。そしてそのたびに、自分から何かが消えて行くのを感じていました。

また気が付くと、その黒い塊は一抱えほどの大きさになっていました。
触ってみても影のようになっているだけで、なんの感触もありません。
何の害も無いようなので少年は、気にせず暮らすことにしました。
それは淡々とした毎日でした。
またそれから数年後、いつしか黒い男となっていた彼は、ふっとあの黒い塊の事を思い出しました。しかし、自分の胸を見てみても、もうあの塊は存在していません。
あれはなんだったんだろう？
黒い男は胸の内で不思議に思いました。けれども、もうあの黒い塊は存在していません。
なので黒い男は「幻だったのかもしれないな」と考えて、黒い塊の事は忘れて生きて行くことにしました。

そう。
白い娘の言葉で黒い男は、自分の胸の中にあった、黒い塊の事を思い出したのです。
しかし、あの黒い塊は消えてしまったはず。黒い男は、そうも思いました。
白い娘は何やら訳知り顔で話しかけてくるので、黒い男は気になって、黒い塊について聞いてみることにしました。
「詳しいことはわかりません。私はあなたのことを詳しく知りませんもの」
白い娘がそう言うので、黒い男はぽつりぽつりと昔の事を話し始めました。
……
全てを語り終えた後に、白い娘は言いました。
「その塊を、あなたはまだ持っているでしょう」黒い男は娘の言葉の意味が理解出来ませんでした。

「この辺りでいいかしら」黒い男が気が付くと、二人はいつの間にやら狭い路地裏に入っていました。
「こんな所で何をするつもりだ？」黒い男は訝しんで聞きました。
彼の心に疑念が、かま首をもたげました。この白い娘も俺を騙す詐欺師だったのか、と。
けれども、黒い男は逃げ出しもせずに白い娘が何をするのかを待っています。
彼はこうも思っていました。白い娘が俺を騙したとしても、信じた俺が悪いというだけのこと。どうせなら、この娘が何をするかを最後まで見てみようじゃないか、と。
突然に白い娘はどこからか、大きな剣を取り出しました。
それはそれは大きな剣でした。
そして、白い娘はその大剣を黒い男に向かってゆっくりと振り下ろしました。
避けようと思えば十分に避けられるでしょう。
しかし、黒い男は避けるつもりは全くありませんでした。
ああ。
俺はここで死ぬのか。
黒い男は静かに目を閉じ受け入れました。
けれども、いつまで経っても身体を切り裂く痛みは襲って来ません。
そうか。
俺にはもう痛みもなくなってしまっていたのか。黒い男はそう考えました。
自分の身体がどうなったのか気になって、静かに目を開いてみることにしました。
黒い男の眼前に驚くべき光景が広がっていました。
目の前で大きな大きな大剣の、その刀身がきれいさっぱり削れて消えてしまっていたのです。黒い男は声もあげずに平然と白い娘に

尋ねました。
「これは、どういうことなんだ？」
「あなたには、本当に何もないようね」白い娘は素晴らしい宝物を見つけたように本当に嬉しそうに微笑みました。
白い娘にとって黒い男は宝物そのものだったのです。
「これは、どういうことなんだ？」黒い男はまた、疲れたように尋ねました。
「私の創ったこの剣は、人の心を攻撃するものなの。あなたには心がほとんどないようね。全てを呑みこむ黒い塊に守られているわ。だから、剣が消えたのよ」
当然のことながら、黒い男は納得ができません。
だって、そんな剣の存在など黒い男は聞いたこともありませんでしたから。けれども、あの大きな剣はどこから現れたのでしょう。
白い娘はそんなものを持ち歩いてはいませんでした。とても隠せるような大きさではありません。
白い娘が不思議な力を持っているのは間違いないようでした。沈黙を守る黒い男に、白い娘が続けます。
「その黒い塊には特別な力があるようね」
白い娘は真っすぐに黒い男を指差しました。けれど、黒い男には黒い塊など見えません。
「黒い塊なんてないじゃないか」
「いいえあるわ。確かにあるわ。――あなたは、その黒い塊に飲みこまれてしまっているのよ」白い娘ははっきりと断言しました。
黒い男は静かに納得しました。
そうか。
俺に黒い塊が見えないのは、自分自身が黒い塊に包まれていたから。
自分が恐怖も何も感じないのは、黒い塊が感情を吸い込んでくれるからだったのか。
「私と一緒に戦って下さりません？」白い娘は唄うように言いまし

た。そして、その理由を語りました。
なんでも強い賭争者はみな、心を攻撃する術を持っているそうなのです。
黒い男は喜びも怒りも哀しみも楽しさも感じません。どんな心の攻撃にも耐える力を持っています。白い娘は、黒い男の力を最高の才能だと感じましたから、それはもう熱心に説得しました。
白い娘があまりに熱心に説得するものですから、黒い男はとうとう折れて二人は一緒に行動するようになりました。

それは寒い冬の日。
それが二人の初めての出逢いでした。

闘争の旅人

同じ国、同じ時、別の場所。男は自らの血の導きを感じていた。
男の名はカハラ。
少年というべきか青年というべきか、大人へと変わりゆく間にあるような年の頃。
小柄な体躯ではあるものの、しなやかで頑強な肉体。ただただ、敵を屠る為だけに鍛え上げられた鋼の肉体を持っていた。

彼は旅人だった。
風に吹かれて各地を巡る旅人。
旅先で、賭争によって全てが手に入るこの国の事を知り、訪れてみようと考えたのだ。
カハラにとってこの国のその法律はとても都合が良かった。
闘争に、こと欠かない生活。
強者と戦うことはカハラにとって、もはや生活の一部だった。
今日も闘技場で賭争を行う。賭けるものは己の全て。奪うものは、相手まかせ。
全てを賭けて挑んでくる男も、全てを手に入れる為に挑んでくる敵も、カハラは等しく屠ってきた。

カハラは時折考える。
自分は何のために戦っているのだろうかと。
贖罪のため？
屠ってきた数多の敵に戦えと言われたから？
戦いこそが生を実感出来る唯一の場所だから？
全てが正しいのだろう。
だが、全てが違う。
カハラにとって戦いとは大きな流れの一端。

戦いに身を投じ続けた彼の目には、普通では見えぬ何か別の流れが見えていた。
カハラは白い道着に袖を通し、帯を締め、髪を結い、額に手拭いを結んだ。
古い借り宿から石造りの路地に出る。向かう先はこの街の地下闘技場。

地下闘技場には戦いの場がある。
そこでは日夜、賭争が行われている。
武器の使用は禁止。それ以外の反則はない。
それは、貴族たちが己の興奮のために用意したルール。
剣であっさりと刺し殺すよりも、拳でじわじわと嬲り殺す方が好みの趣味の悪い出資者たちの取り決めたルール。闘技場では武器は使えない。
だから、こんなことは良くある。日常茶飯事と言っていい。カハラは悠然と振り返る。

空を切り、矢が放たれた。
額狙いの一撃。カハラは首だけで躱す。仕留めるつもりもない、不抜けた一撃。
射手は逃げる。
誘いのつもりなのだろうか。それともこの程度の腕で命を狙ったつもりだったのだろうか。どちらにしろ逃がすつもりなどないと、カハラは背後の射手を追った。
小路に入ると、射手は振り向く。矢は既につがえてある。
誘いのつもりだったか。
アーチェリを構え、こちらを狙っている。
「お前の名はカハラか？」問いに対して、カハラは無言で肯定した。
「お前に賭争を申し込む。賭けるものはお互いに、お互いの全てだ」
カハラはこれも、無言で肯定した。

武器使いは闘技場では戦えない。
勝利を万全のものにする為なら、この程度の画策は行うだろう。
敵はアーチェリを構えた。
戦いが始まった。
二人の距離はおよそ五メートル。武器を持たないカハラにとって、圧倒的に不利な距離。
しかし、遠距離攻撃のアーチェリには少々近すぎる距離だ。
矢は射るまでに時間がかかる。
無手側の勝機は、相手が矢を射た一瞬後、二の矢を継ぐ前に仕留めるのが最善。
その為には、まず第一の矢を躱す事が肝要。
射手は静かに弓を射た。その瞬間をカハラに読ませないほどの静かさ。
なるほど、これは一級品。
カハラは小路の地を蹴り、壁を蹴り、これを躱す。とても人間業とは思えない動き。いや、あるいは既に人間の域を超えているのかもしれない。
射手が二の矢に手をかける。流れるように速やかな一連の作業。敵は継ぎ手も一流のよう。
縦横無尽に駆け巡り、相手の意を逸らす。
射手まであと一メートル。

と、そのとき、放たれた一の矢が向きを変え、カハラの背へと襲いかかった。
本来であるならば、あり得ないはずの動き。
対してカハラは静かに思う。最近は妖術使いが増えたな、と。
背に迫る矢を感知し、素早く右手で掴みとる。だが、その手で掴み取ったにも係わらず、その矢の感触は一瞬にして消え去った。
まるで矢の存在自体が幻だったかのように。路地の壁に背を向けて、横走りで一気に射手へと迫る。二の矢を素手で弾き逸らしてア

ーチェリを折る。
「参った。降参する」
それで戦闘は終了した。
「これが俺の全てだ」カハラは射手が差し出した紙を手に取り一瞥する。
賭争の文書。全財産を渡すという証明書。渡す代わりに無法な襲撃を見逃してくれと言う懇願。カハラはそれを突き返した。彼にとって、富など戦闘についてくる副次的なものに過ぎない。
彼は富など求めていない。カハラは無言で歩き始める。
彼は命も求めていない。
そして、カハラは今日もまた地下闘技場へと身をやつす。

地下闘技場での戦い

王都ロベリア。
ここはその南西地区。
かつては教会の地下大聖堂であった場所。
古は聖なる賛美歌が連日、響き渡っていたであろうこの場所も、時の流れと共に移り変わり、人間の欲望渦巻く賭場となり果てていた。
ロベリア第三闘技場。それが今日の、この場所の呼び名。
建物自体は、それが造られた千年前と等しく芸術的な美の集大成。シンメトリに配置された大理石の柱が印象的な空間。
だが、そこで行われているのは人間の欲望渦巻く賭争。賭争を用いた貴族の為の賭場。

そこの闘技場に二人の人間が馬車に揺られて現れた。
全身が真っ黒な男と、全身が真っ白な娘。
男の名前はクロード。娘の名前はシロナ。
シロナがクロードの手を引いて、クロードはただ引かれるがままについて行く。
「ここが例の闘技場か？」
「ええ。そうよ。ここでは日夜、賭争が行われているの」
「へぇ」
その光景を見たクロードは漆黒のフードの奥に隠されたその瞳を少し見開いて、掠れた声を発した。
円形の闘技台の上で、複数の人間が殺し合いを――賭争をしている。
それはクロードにとって信じがたい光景だった。
本当に日夜賭争が行われているとするならば、地上の街は賭争に負けて地位も名誉も失った人間で溢れかえっているはず――

「俺は、ここで戦うのか？」
「ええ。あなたはこの場所でなら最強だから大丈夫よ」
シロナは確信と共に言いきった。
「あなたは、どんな心術の影響も受けないはずだから」

心術。
それがこの術の名前。
シロナがクロードにした説明を要約すると、この力は心の力に影響する力であるらしい。
心の力なんて実にあやふやなもの。曖昧で形の無いもの。だが、シロナの大剣を見る限り、そんな力が確かに存在するらしい。
クロードは思う。
もし、心の力なるものが存在したとして、自分が強いとは思えない。
とてもじゃないが思えない。
クロードは、自分の弱さを自覚していた。
これと言って望みもない。未来もない。そんな自分には心の力など皆無だろう。
シロナにそう告げると「だからこそよ」と返ってきた。
心術による衝撃は心に影響する。かぎりなく心が無に近い人間には効かない筈。と、シロナは自慢気に語った。
不完全な人間。無感情人間。ただ惰性で生きているのみの自分。
そんな自分がある一点においては最強と称される。
その言葉が本当か嘘かは分からないが、クロードにとって、その言葉は、ほんの少しだけ心地良かった。
「この闘技場には二対二の戦いもあるの。そこで戦いましょう」
シロナは慣れた様子で闘技場の受付へと進んでいく。
「俺は、何をすればいいんだ？」
「私の前に立っていてちょうだい。今はそれで十分だから」
クロードは思った。戦うはずにも係わらず、立っているだけで十

分とは異なことを。
しかし、俺は請われてここにいる。頼まれたことを果たせばそれでいいだろう。
「分かった。俺は立っている」

二人は手早く手続きを済ませ、順番を待った。
この闘技場は、名前を登録しておくと勝手に賭争が組まれて、戦って勝つと相手の財産を貰えるという簡単な仕組み。賭争法によって、財産を全て奪うことは出来ない。よって全財産を賭けて負ければ、賭争者個人の所有する財の内、生活に最低限必要とされる財以外は全てが勝者に与えられる。
けれどそんな保証はわずかなもの。自立して生きて行くには全然足りない。
敗者は、金も家も名誉も何も失って、貴族のお抱えの賭争者にでもなるしかなくなる。もしそうなれば、家畜のように貴族の娯楽として死ぬまで戦うしかない。
この闘技場の賭争者も殆ど貴族の持ち駒。
貴族の持ち駒となった賭争者が全てを賭けて戦った場合でも、賭争者個人はそもそも富を持っていない。
むしろ、負けた時のリスクを考えて、賭争者名義の財は何もないようにするのが常だ。
圧倒的に貴族有利の契約。しかし、そんな契約に縋ってでも生きなければならない賭争者がこの街には溢れている。

そんな賭争者の中に、異質の賭争者が存在していた。それこそが心術使い。
普通の賭争者に出来ることは、ただただ殴り合うのみ。そういった連中は程度の低い『下の区画』に分けられて賭争をする。シロナは、そういった普通の人間を倒し続けて、この『上の区画』に立っていた。

心術使い。
彼らの戦いは通常の戦いとは一線を画す。
なにもない所から、唐突に武器を取り出して敵を打ち倒す。この闘技場のルールでは武器の持ち込みは禁止。厳重に警戒されているにも係わらず、戦っている人間は、何かしら武器のようなものを持っている。
操っている。
普通の人間には絶対に立ち入れない領域。
この闘技場で一定の戦果を残した賭争者は低い区画での賭争を禁じられる。
貴族は強者が弱者を延々と嬲る姿にうんざりしていたからだ。
闘技場の出資者たちは戦いに、実力の近い者同士のヒリつくような緊張感を求めていた。
『上の区画』で戦う賭争者は『下の区画』では戦えない。シロナはつい先日、『上の区画』に上がったばかりだった。
シロナは自分が『上の区画』で勝ち残れるか不安だった。
私の力は本物だ。私の決意は本物だ。彼女は確かにそう信じている。
下の区画にも少数はいる心術使いとも戦い、そして勝ち抜いた。生き抜いた。
けれど、もし相手の力も本物だったなら。
そんな不安が彼女の脳裏に渦巻く。負ける要素は極力排除しなければならない。
どうすれば勝てる？　どうすれば生き残れる？　どうすれば願いに近づける？
そんな苦悩の日々の中でシロナは見つけた。心術使いの賭争において最強となるであろう、この男を。
「今の内にひとまずは、どんな戦いが行われているか、見てみましょう」

クロードは首だけで頷く。
二人は自分たちの戦いが始まるまでの空いた時間に、他の賭争の様子も見てみることにした。
四角形の闘技台。その周囲は金網の囲いで覆われていて、決して逃げることなど叶わない。それも当然。ここ貴族の娯楽のための施設。賭争者が逃げ出して、それで終わりなど興がそがれる。
四角形の角一点とその対角にこれから戦うのであろう人物が二人ずつ待機している。
クロードとシロナが立っているのは、赤く塗られた柱の傍だった。奥に対となる青い柱も見える。
それぞれの二人ずつの人間が柱の傍から歩み出て、四角形の中心で向き合った。
見届け人と思しき男によって賭争の文書が読みあげられる。
お互いの全てを賭けた戦い。
両組とも有名な賭争者らしく、まだ仕合いが始まっていないと言うのに闘技場は異様な熱気と盛り上がりを見せていた。
この戦いの勝敗にも貴族によって大金が賭けられているのだろうか。

戦闘が始まった。
歓声が辺りを埋め尽くし、耳が割れるほどの騒音を作りだす。
赤い柱の傍には長いローブを纏った人間。男だろうか。目深にフードを被っている所為で判然としない。その赤側ローブが前に出た。もう一人の、黒い長髪の女はその場から動こうともしない。赤側ローブが仕掛けるつもりのようだ。
その両手にはいつの間にやらナイフが握られている。
それに応じて青側の短髪の男が進み出た。
赤側ローブがナイフで切りかかる。瞬く間に、何度も何度も腕を振る。
クロードには、『何度か切りつけている』という事実はわかって

も、ほとんどその動きが見えなかった。
速すぎる。
その全てを青側青年は絡め取るように受けきる。やはりいつの間にか、青側青年の手にも武器が握られていた。
「あれは……鉤爪か？」クロードは目を細めた。
その時、赤い柱の傍から動こうとしなかった黒髪の女が両手を上げた。指先へと、黒い糸のようなものが伸びて、まるで意思を持っているかのようにうねり、青側青年に絡みつこうと伸びる。
動きに対応して、青側の少女……と言っていいのだろうか。年頃は良くわからない。
子供の着るような、繊細に飾り刺繍の施された洋服姿の年若い女性。彼女が小さく動いた。青側の少女が何をしているのか、クロードには到底わからない。
ただ、赤側黒髪女の糸が中空で爆ぜ、のたうちまわって青側の少女には届かない。それだけは事実のようだった。
赤側の組みの戦略。
それは、青側の組みに攻撃を仕掛けさせ、一対一で受けることによって戦力を分断することにあるようだ。青側がコンビネーションを重要視した戦術を得意とするので、分断しようとでも考えているのだろうか。

と、そのとき。
急に青側青年の動きが鈍くなった。出血などの外傷は無い。
だが、確実に、赤側ローブの攻撃が青側青年の身を蝕んだように見えた。
それを勝機と見たのだろうか。
赤側黒髪が前に歩み出る。
青側少女も青側青年を壁に、敵の死角に隠れるようにして前に進み、青側青年の後ろにぴったりとついた。
瞬間。ナイフで切り結んでいた赤側ローブが背後に吹き飛ばされ

た。
青側少女の仕業だろうか。
クロードには分からないことが多すぎる。
青側の男が間合いを詰め、鉤爪を振りかぶる。その腕が赤側黒髪の糸によって絡め取られ止まる。隙に赤側ローブが立ちあがる。
赤側黒髪が何かに足を掬われるように身体ごと宙を舞い、倒れた。
青側青年が間合いを詰めて鉤爪で薙ぐ。
その手を食い止めようと、赤側ローブが立ち塞がった。

直後。
赤側ローブの身体が、走る馬車に引き跳ばされたかのように、横へと吹き飛び――
――勝負が決した。

「驚いたわ」シロナが素直な感想を漏らした。
「どうしてだ？」クロードが問う。
「こちらの赤側の女性。彼女はこの闘技場で最強に近いと言われていたから」
シロナは妙に遠回しな言い方をした。それを疑問に思って、クロードがさらに聞く。
「最強に『近い』と言うのは？」
「この闘技場で一番強かった人が最近現れなくなっただけ。どこか別の街に移ったのか、それとも負けて全てを失ったのかはわからないけれど」
「で、俺はこの二人と戦うのか？」
「近い内に、戦う事になるかもしれないわね。あなたの力が本物なら」
「無責任なんだな」
「そうでもないわ。あなたが偽物なら――もしも、私の目が狂ってたのなら、私も一緒に死ぬだけだから」

一蓮托生、と言う奴か。
クロードにはその言葉が少し、くすぐったく感じた。
そして彼は誰にも聞こえないように小さく呟いた。
「悪くない」

「さあ、もうすぐ私たちの番よ。準備はいい？」
「準備なんて何もない」
先ほどの戦闘。
その根源へと向かう。
常人であるなら、恐怖で打ち震えるであろう戦闘。
その光景を目の当たりにしながらも、クロードは事もなげに言った。
クロードには、なにもない。

恐怖も、怯えも、嘆きも、虚栄も、奢りも、不安も、なにもない。

「さあ、行きましょう」
「ああ」
係りに呼ばれて二人は舞台に上がる。賭けるものは二人とも己の全て。
文書に簡単なサインをする。
そして、先ほど死闘が行われていた舞台へと歩みを進める。
シロナは小声で自分に大丈夫と言い聞かせた。
シロナにはある。

恐怖も、怯えも、嘆きも、虚栄も、奢りも、不安も、全部ある。

それはまっとうな人間であれば当然のこと。
だからこそ、求め、戦い、必要とする。
唇が渇く緊張感。

金網の戸を開けて、一歩ずつゆっくりと舞台へ――赤い柱の傍へと立つ。
おそらく、この舞台に上がった者はみな感じたであろう圧迫的な緊張感をシロナも等しく感じていた。
例外はクロードのみ。
真の意味で人生が決まる戦い。勝てば富を負ければ破滅を意味する戦い。
その恐怖の中ですら、クロードは泰然自若としている。
シロナは改めてクロードのことを凄いと感じた。
彼ならば――
彼と一緒ならば――
わたしは願いを叶えられる――

対となる青い柱の傍にも『敵』が現れた。髭を生やした初老の男。樫の杖を持ち、茶色いローブを着ている。
その後ろには、金色に光り輝く豪奢なドレスを着た女。戦いに赴く姿だとはとても思えないような出で立ち。
「へぇ。あんな格好で戦うのか」クロードはそう呟くも思いなおす。
頭の上から足の先まで真っ黒なローブの自分。頭の上から足の先まで真っ白なドレスのシロナ。
自分たちの格好も人のことは言えない。こんな所で戦おうという輩は、頭がおかしい奴らばかりらしい。それも、納得出来る。
審判人らしき男が、賭争の文書を読みあげている。
もうすぐ、戦いが始まる。
――とはいっても、結論から言えばそれは戦いと言うにはあまりにお粗末だった。

クロードは舞台の真中まで歩いて後、一歩も動かない。
しめたとばかりに、クロードを攻撃する初老の男。
初老の男が振るった樫の棒は、クロードの黒い領域に触れると共

に、消滅した。
困惑し、漫然と同じ攻撃を繰り返す初老の男。
クロードは何もしない。
にも係わらず、初老の男の手の中の棒は現れては消え、現れては消え、するだけで、クロードにダメージを与えるに至らない。
初老の男は狼狽している。その額から、じわりと脂汗が滲み出している。
後詰めとしてその様子を観察していた、豪奢な女が業を煮やして宝石を飛ばした。
過剰な装飾。それこそが彼女の武器。
宝石たちは中空でお互いにぶつかりあって細かな破片となってゆく。
鋭利な破片と化したその宝石たちは崩れゆく憂愁の美を湛えながらクロードへと迫る。
クロードは目の前に脅威が迫るにも係わらず、ただ、呆然と考えていた。
武器の持ち込みは、禁止されているはずなのに。これはアリなのか――と。
弾丸と化した凶刃。
しかし、それすらも、クロードに触れる前に失速。
クロードの黒い服に阻まれてキラキラと細かな欠片は地へとただ落ちてゆく。彼を傷つけるには至らない。
二人の敵に驚愕の表情が浮かぶ。
ただただそこに佇むだけの男に、『敵』は心の底から恐怖していた。
「ねぇ、お二方。もしよろしければ、降参して頂けませんか？」シロナはにこやかに話しかけた。
「誰が降参なんて――」毒づく女。そんな女へとシロナは冷徹に告げる。
「なら、クロード。二人とも殺して下さい」

クロードは動かない。
戦闘前には、何かをしろとは言われていなかったからだ。
初老の男と豪奢な女は、未知の恐怖に怯え全身全霊を持ってクロードを攻撃した。巨大な樫の棒と煌びやかな宝石の渦がクロードの視界を埋め尽くした。
尚も佇むクロード。
主催者がアリだと言って、賭争を止められないのだから、あれはアリなんだろうな。
宝石に関してクロードがそう結論づけた時、二人の敵は力を使い果たしてぐったりと崩れ落ちた。
戦いが終わった。

「――これは本当に賭争なのか」クロードはそう呟いていた。
クロードにはそれが賭争とはとても思えなかった。
自分は本当に何もしていない。相手の攻撃が何故か効かない。結局、俺は生きている。
シロナの見る目とやらは確かだったようだ。

「御苦労さま」シロナはとても嬉しそうに笑った。
「ああ」たった五分ばかりで、あと十年は暮らしていけるほどの大金が手に入った。
「やっぱり、大丈夫だったでしょう」
「ああ」クロードは実感が湧かぬと言った面持ちで答えた。

この場で行われているのは心を摘む戦い。
クロードにはまるで実感出来なかったが本来ならば心術による攻撃は心に響く。人の負の感情を狩りたてる。過去の忌まわしき記憶を呼び起こす。
シロナはその恐ろしさを心の底から熟知していた。
心術の威力を支えるのは、術者の自信。勝ち抜いてきた自負。

絶対の自信をもつ技を掻き消され、敗北を意識した人間に勝利は訪れない。

それから二人は、地下闘技場を制覇した。

綿密な知略を持って挑むシロナと、心術に対して最強とも言うべき特性を持つクロード。

心術の効かぬクロードに恐れをなして、逃げまどい敗れる者。

勝利を確信し開始直後に全身全霊をもって、クロードを叩きつぶそうとした者。

クロードを無視してシロナを集中狙いしようとするも、クロードを盾にされ返り討ちにあう者。

二人は多くの者と戦った。

けれど、二人は只の一度も敗北を覚えなかった。

二対二の頂点となって挑戦者を待つ日々。その中で莫大な富を手に入れていた。

シロナは自らが着実にその目的へと近づいていると実感していた。

その日々の中。クロードを包む黒い衣。その闇が以前よりもより深くなっていることに、二人はまだ気づいていない。

カハラと魔法使いの少女

物心ついたとき、カハラは既に戦っていた。
真に強い男となる為に、延々と修行を続けた。カハラの半生は修行と戦いの日々。
彼に父親はいなかった。カハラを鍛えたのは祖父だった。
「強くなれ。誰よりも――」
戦いのこと以外、何も語らなかったカハラ祖父が病床で残した最後の言葉。
いまわのきわですら、最強の夢を語った祖父。その祖父の亡骸の前でカハラは誓いを立てた。誰よりも強くなると。
そうしてカハラは旅に出た。
戦いこそがカハラの全てであったのだ。カハラが目指したのは街だった。
人が多ければ強いものにも出逢えるはず。町を訪れ、国を移り、カハラは数多くの相手と死闘を繰り広げた。しかし、カハラの胸に灯る闘争の炎が燃え尽きる事は無かった。
風の噂で荒れ果てて争いの絶えない国の話を聞いた。
聞いた通りにその国の街は争いで溢れていた。至る所で行われている賭争という名の戦い。しかし、カハラにとってそれは戦いではなかった。
茶番。
戦闘になりえないほどの彼我の戦力差。
こんなところで戦っても、最強の称号は得られない。
カハラの強さを聞きつけた男が、彼を闘技場に誘った。
しかし、茶番。
カハラを潤す敵が現れることはなかった。カハラは街を離れた。
転々と旅を続けていると、大きな街には闘技場があるということを知った。

その後カハラが向かったのは王都ロベリア。国で一番大きな街。
妖術使いが闘技場に現れる街。それがカハラのロベリアに対する感想だった。
今までと同じように全てを薙ぎ倒した。
闘技場で最強の男と謳われるようになったころ、カハラの目には違う何かが映っていた。

カハラは時折考える。
自分の目的は何なのだろうか、と。
世界最強になるため？
祖父の夢を叶えるため？
屠ってきた敵の為？
そう考える度に、戦えばその答えが見つかると結論づけた。
そうして戦いに明け暮れたある日。
彼の目には、ある大きな流れが見えていた。
それが何なのか、カハラには分からない。
けれど、カハラは自分がこの流れに従って生きるべきだと直感していた。

夕暮れの街を彷徨っていると、突如として胡散臭い風貌の男が現れた。
「おや、もしかして、貴公はカハラさんではありませんかな？」
伸びっぱなしのボサボサ頭に不精髭。ともすると浮浪者。だが、その瞳は魅力的で力強い意志の脈動が見え隠れしている。
カハラは小さく頷いた。
「貴公をとても強い賭争者だと伺いました。本当ですか」
カハラは小さく頷いた。
「そうですか。貴公のお力を見込んでお願いがあるのです。――ぜひ、私についてきて頂けないかな」胡散臭い風貌の男は大仰に手を広げてカハラを誘う。

カハラは小さく頷いた。
「ありがとう。では、こちらへ」
カハラは促されるままに進む。

連れて来られた先は小汚い酒場。
薄明かりの奥に酒瓶が並べられた棚。少し手前にカウンターテーブルがある。こんななりの店なのに人気はあるようで、カウンターには三人、先客がいた。
三人とも、酒を飲むような人間には見えない。
髪も肌も白い人間と、頭の先から足の先まで黒く、店内の闇に溶け込むように佇む人間。そして、幼い少女が座ってた。
男はカハラにも座るようにと促した。幼い少女の隣の席へと。
しなやかで美しい黒髪の少女。その薄暗い店内の中で彼女だけが淡く光り輝いているようにも見えた。黒く艶やかな髪。光の当たり方でとても濃い緑のようにも見える。
それは烏の濡羽色にも似ていた。この国では見られない色の髪。
いや、全世界を探してみたとしても、このような髪の持ち主は彼女以外には存在しないだろう。
それほどまでに、その髪は美しかった。

胡散臭い髭の男は、そのままカウンターの裏に入る。そしてにこやかに言った。
「ご注文は以上で？」
カハラは怪訝に思うも無視をする。それが自分に向けられた言葉ではない事に気づいていたからだ。
「ええ、ありがとう」隣にいた黒髪の美しい少女が答えた。
「貴方を強いお方だと見込んで、お願いがあります」
カハラは答えずに、この少女が依頼主なのか。と、少女の瞳をみつめて考えた。
依頼主にしては、若すぎる。

賭けの為に画策するほど老獪には見えない。
穢れているようにも見えない。
むしろ、澄んだ川の流れのような美しさを内に秘めている。
「貴方に、あるものを取り返して頂きたいのです」
カハラは小さく頷いた。
「受けて頂けるの？」少女は驚いたように聞き返す。
これほどまでにあっさりと依頼を受けて貰えるとは思っていなかったようだ。
それもそのはず、なにせまだ依頼内容も報酬も何も告げてはいないのだ。
普通の人間なら何も聞かずに引き受けたりはしないだろう。にも係わらず、カハラはまた小さく頷いた。
少女はカハラの無欲に驚き、そして続けた。
「取り返して頂きたいものは、この印章です」少女は汚れた紙を取り出した。
その紙には鷹が彫られた小さな石が描かれていた。
「この印章をある人間から取り戻して頂きたいのです」
カハラは小さく頷いた。
「交渉成立のようね。これで私たちは同志よ。よろしくお願いするわ」奥にいた人間の内の一人、白い娘がカハラに語りかけた。カハラは少しだけそちらに目を向け、また依頼主である少女の方へ顔を戻した。
「この印章がどれだけ大切なものであるか、わかって頂く為に、またどれだけ危険なものであるか理解して頂くためにも、この印章に関する一つの昔話をさせて下さい」
皆の注目が集まる中、依頼主の少女は静かに語りはじめた。
「ある国に一人の男がおりました。
男はひょろりとしていて力が弱く、いつも誰かにいじめられておりました」

――――

それは広く知られた有名なお伽噺。

印章の男の物語。

シロナと魔法使いの少女

そのお伽噺はこの国の者であるなら子供のころに、誰でも聞いたことのある類の物語。
白い娘――シロナは暗い酒場で、自分の過去を思い出していた。
遠い昔に、父が彼女に語った物語。

「――これで昔話はお終いです。この印章が盗まれてしまったのです。私は、あなたがたに盗まれた印章を取り返して欲しいのです」
黒髪の美しい少女は、印章の男の物語を語り終えた後に言った。
シロナは不思議に思って、娘に聞いた。
「ただ取り返したいのなら、あのお伽噺のように、とり返したらいいでしょう？」
それは当然の疑問。
お伽噺の最後では、魔法使いが男の全てを奪うのだから、印章を取り返すことは容易なはず。
「いいえ、それは出来ないのです。あの方法が出来たのは魔法使いが印章の男に、約束を破れないように呪をかけていたからですから」
「どうして、取り返すなんだ？」
シロナの隣にいた黒い男――クロードが依頼主の少女に静かに問いかけた。
至極当然の疑問。
けれども、シロナには、その疑問の答えが分かっていた。
なんてことはない。その少女が正当な持ち主だからだ。
「私は、この物語に出てくる魔法使いの子孫なの」黒髪の少女はシロナの思った通りの答えを返した。
「そうか」クロードはそれだけ言って、また闇の中へ溶け込むように俯いた。

魔法使いの子孫。お伽噺で語られるほどの存在。
シロナは喜びにうち震えた。
思いがけずに、目的に近づけた。いや、ともするとこの魔法使いの少女が自分の願いを叶えてくれるかもしれない。そんな欲が生まれてしまったからか、シロナは依頼主の少女を柄にもなく急かしたてた。
「方法はどうするの？　相手は？　誰からどうやって取り戻すかも私たちで考えるの？」
そんなシロナに、魔法使いの少女はとても落ちついた様子で答える。
「大筋は出来ています。けれど、一筋縄ではいかないでしょう。なにせ相手は――この国の王、フェル・ラン・ケルスなのですから」

王が。
盗みを？　シロナにとってそれは衝撃的だった。
現王は庶民にはとても評判が良い。
つい先々月に、先王が亡くなる直前に先王が実の息子の存在を公表し、そのまま後を継いだばかり。
にも係わらず、大きな混乱もなく国を治めている良き王のはず。
先王から位を譲り受けた直ぐ後に、貧民に富を分け与える、異例の給付制度を作った民に優しい王のはず。
「詳しく聞かせて貰える？」
「ええ。もちろんです。王の持つ印章を賭争で奪うことが出来ないのは自明です。王と勝負が始まってしまえば印章は効力を発揮してしまいます。なので、こっそりと奪うしかありません」
魔法使いの娘の言葉は、シロナが求めていたものとは違っていた。
シロナは王から奪う正当性を気にしていた。だけど、思いなおして止めた。だって、この少女は魔法使いの少女なのだから。もしもこの少女が悪であったところでそれは私の知り及ぶところではない。
そう考えて、自分の願いを叶えて貰う為だけに、実行の方法だけ

を言及することにした。

「奪うといっても、そう上手くはいかないんじゃないの？」

「そうですね。王は常に印章を身につけています。自らは絶対に負けない。その自負があるからこそ、この国を食いつぶして回っているのです」

「食いつぶす？　私の印象とは随分と違うのだけど？」

「王は自分の主催する闘技場で暴れ回っているのです。自らが目を付けた人間しか参加させない、賭争とそれを肴にするものの為の賭場が存在するのです。それを娯楽代わりにして、強者を屠りこの国の富を貪っているのが王なのです！」

なるほど。と、シロナは頷いた。

国の行く末を案じて、国を救うために、魔法使いの少女はこの依頼を持ってきたのだと納得しかけた。

けれど、シロナの頭の片隅に、小さな疑問が浮かび上がった。

「ちょっと待ってもらえない？」

王の主催する闘技場。そこが特権階級のみの賭場、兼闘技場だとするならば、話しが噛み合わない。

「一部の貴族から富を奪うことが、どうしてこの国を潰すことになるの？　聞く所によると、王は貧民に富を分け与える給付制度まで作ったとか。むしろ貧しい民の為を想っての行動とすら思えるのだけど」それはすぐに湧くもっともな疑問のはず。

「――確かに専属闘技場の存在が王を悪たらしめると証明することは出来ません。けれど、国王はこの国を明らかに利用しています。もし、国王が本当に全ての臣民のことを想っているのだとすれば、どうして賭争法などという、ふざけた法を改めないのでしょう！」

魔法使いの少女は声を上げて言いきった。

シロナは返事が出来なかった。

賭争の法を無くすなんて、考えたこともなかった。

戦って勝者を決めることが誤っているなんて思ったこともなかっ

た。

幸せになるには、戦って――

――賭争して勝つのが一番の近道だと思っていた。

「あなたは、王から最強の印章を手に入れてどうするつもりなの？」

「なにもしません。ただ取り返えしたいだけです。それだけで、この国は静かに着実に変わってゆくことでしょう」

それは確かにその通りだろう。

反乱が起って王政が滅ぶかもしれないし、次の王の代になると、賭争によって富を奪われることを恐れた王が賭争の制度を廃止するかもしれない。王が賭争法を続けている理由が、自分は絶対に負けないと印章が保証してくれているからなのだとすれば、賭争法がなくなる可能性もある。

シロナは、賭争法が無くなることはいい事だと感じた。魔法使いの少女が正義だと感じだ。迷いは無くなった。

「それで私たちは、何をすればいいの」

「まずは王の専属闘技場で戦って勝って下さい。もうすぐ、あなたたちの元に王からの使者が訪れるでしょう。あなたたちの表の世界での名声は十二分にあります」

「私たちは二対二が専門よ？」

「それは関係ありません。王は強い者なら誰でも構わず集めているの。王は過去に何度か、二対二の専門家を二人で一人として、同じ舞台に上げて戦ったこともありますし――」

「その結果は？」それは、聞くまでもないことだった。

「王が勝ちました」

「勝ち残った後、私たちはどうすればいいの？」

「王と戦う前に、王が戦っている近くで不意をついて印章を奪って欲しいのです。不意打ちですら、一人では到底敵わないでしょう。

ですが、あなたがたなら何とかなるかもしれません」
カタンと音がした。椅子の下がる音だった。白い道着に身を包んだ男、カハラが立ちあがっていた。
「カハラさん！」魔法使いの少女が叫んだ。
振り返りもせずにカハラはその場を立ち去ってしまった。魔法使いの少女が急いで立ちあがり、追いかける。朽ちかけた扉がギィと揺れた。
しかし、すぐさま追いすがったはずの魔法使いの少女の視界には既にカハラはいなかった。
「私の頼み方が悪かったのかな」落ち込んで、少女は酒場に戻る。
「いいえ、そんなことはないわよ」
シロナも立ちあがった。
「それで報酬は？」
「あなた方の望むものを。でも、私の力の及ぶ範囲で、ってなっちゃいますが」
「……十分よ。行きましょう、クロード」「ああ」
シロナはクロードの腕を引き立ち去ろうとした。
これ以上、ここにいても聞ける話はないと判断したからだ。
それに、思わず笑みがこぼれそうだったから。そんな顔を誰かに見られる訳にはいかない。
「ちょっと待って下さい」
魔法使いの少女が二人を引きとめた。
「今後もし、あなたがたが王の目にとまり、王の闘技場で戦うことになるのなら、しばらく城外に出てくることは出来ません。私と話すことも出来ないでしょう。だから、これを持って行って下さい」
魔法使いの少女が渡したのは木彫りの凝った万年筆だった。
「私にもしも、伝えたいことができたなら、このペンで何処かに文字を書いて下さいな。そうすれば、私に文字が届きます」彼女はカウンターテーブルにスラスラとペンを走らせた。その文字が踊るように動き、浮き上がり、蝶のように辺りを舞った。魔法使いの少女

らしく、魔法のような道具のようだ。
やっぱり魔法使いの少女は、本当に魔法使いであるらしい。
「わかりました。報酬、よろしくお願いしますね」
シロナは、その古めかしい万年筆を受け取ってクロードを引き連れてその場を後にした。
うきうきとした気分だった。
胸が躍るような気分だった。
魔法使いが願いを叶えてくれる。
ああ、まるで夢のような出来ごと！
さっきの話が本当かどうかはすぐにわかる。
シロナとクロードの元に、王からの使者が来るかどうか。
もし来たのなら、依頼を完遂しよう。そして絶対に、元に戻して貰うんだ。
シロナはそう、心に決めた。誓うと遥か昔の父の事を思い出した。
いつも優しく笑ってくれた、お父さん。
お父さんは、私が元に戻れると知ったら、喜んでくれるだろうか。
シロナはゆっくりと、その半生を振り返った。

白い娘の物語

これは白い娘がまだ白くなかったころ。
ある丘の上の小さな小屋に住んでいたころのお話です。

娘は父と二人きりで生活しておりました。
いつも優しい笑顔の父との穏やかで温かい生活。
娘はとても幸せでした。
彼女の父は、とある名門貴族の出自。
けれども、その父は身体が弱く、いつも床に伏し貴族の栄華は見る影もなくなってしまっていました。
もう二人で外へ出かけることも出来ませんでしたけれど、それでも娘は幸せでした。
だって大好きな父とずっと一緒にいられるのですから。
けれども、そんな幸せも長くは続きませんでした。
彼女の父親のようすが急に悪くなってしまったのです。
病に苦しみ、
痛みにうめき、
ただただ死を待つだけの父。
娘は父親を助けるために小さな置き鏡に願いました。
それは、彼女の家系に代々つたわる魔法の家宝。
のぞきこんで望みを願えば、どんな願いごとでも一度だけ叶えてくれるという魔法の鏡。
けれども、その代償として映った人間の色をうばってしまうという魔法の鏡でした。

娘は鏡にいのりました。
お父さまのびょうきをなおしてください。
お父さまをげんきにしてください。

彼女の父親はみるみる顔色がよくなり、元気になりました。
娘はみるみる色が抜け落ちて――全身が真っ白になってしまいました。
そのあと鏡は、自らの役割はもう果たしたとでもいうように、灰になって崩れ落ちてしまいました。
娘はとても喜びました。
白くなってしまったことなど、気にはなりませんでした。
だって、優しいおとうさまが元気になってくれたんですもの。
嬉しいに決まっているわ。
けれども、娘の父親はそれをなげいて哀しみました。
どれだけ色鮮やかな服を着せても、娘に触れると見る間に白く抜け落ちてしまいます。
つややかな茶毛も薄紅色の頬も、今となってはみるかげもなく、ただただ雪のような白一色。
その上どんなに着飾っても、その服までも真っ白に染まってしまう。
これでは社交会にも出向けやしない。
これでは娘は幸せになれない。
気味悪がられて誰も近寄らないに違いない。
娘の父親はそれをなげいて哀しみました。
白くなった娘を見て、周囲の者はとてもとても驚きました。
娘だと気づかない者すらありました。
だって、昨日までは普通の少女だったのに、今では全身が、ほんとうに真っ白なのですから。

――娘を待っていたのは、彼女が想像もしなかったこと。
街の者たちの負の感情。侮蔑、憐憫、忌避、嫌悪。
娘は家から出られませんでした。
少しでも外に出れば罵声を浴びて、呪いの子として石を投げつけ

られるのです。
娘の家はますます落ちぶれてしまいました。
そんなある日、娘の父は娘を残して、家を出てしまいました。
娘はとても哀しみました。
一緒に居てくれるだけで心強かった、父。
娘を愛し、死を悟ってもずっと一緒に居てくれた父。
その父がいなくなってしまったのですから、その哀しみも、ひとしおです。
おとうさまも、わたしをきらいになってしまったの？

寂しくて、
寂しくて、
娘は毎日、泣きはらしました。

娘の父親がいなくなり、一つの季節が巡りました。
そんなある日、丘の上の小さな小屋に一通の手紙が届きました。
それは娘の父親が彼女に宛てた一通の手紙。
彼が死の間際に残した手紙でした。
そこには彼女の父親の想いが込められていました。
娘の色を元に戻すために、魔法使いを訪ねて旅に出たこと。
旅先で賭争に敗れ、家へは帰れなくなったこと。
この手紙が届くころには自分はもう死んでしまっているであろうこと。
そして、最後にこう綴られていました。

悪い父でごめんなさい。
お前と過ごした日々は温かかった。
ずっと、一緒にいてやればよかった。
お前は幸せになるんだよ。

白い娘は唇を噛みしめて泣きはらしました。
お父様は、私を愛してくれていた。
そのことが嬉しくて、愛しい人が死んでしまったことが悲しくて。
娘は毎日、泣きはらしました。
こんな身体になってしまったせいで、結局おとうさまは死んでしまった。
鏡に願っても結局は救われなかった。
鏡に祈ってしまったせいで、最後の瞬間も、おとうさまの傍にいることができなかった。
そう思うたびに白い頬を涙が伝いました。
お父様の言うように、私は幸せにならなくちゃ。
どうすれば幸せになれるのだろう。
普通の身体に戻りたい。普通の色に戻りたい。
そうすれば、おとうさまの言ったように、普通の人と同じように素敵な恋に落ちて、普通の人と同じように幸せになれるに違いない。

白い娘はそう考えて、白の呪いを解こうと旅に出ました。
この呪いを解くには、魔法使いに願うしかない。
あの鏡を作った魔法使いなら、呪いを解く事も出来るに違いない。
そう考えて、魔法使いを訪ね歩きました。
山を越え、川を越え、森を抜け、魔法使いを探し歩きました。
ただただ歩いて探すことしか、白い娘に出来ることはありませんでした。
そんなある日、白い娘は暗い森の中で道に迷ってしまいました。
不気味な静けさのただよう森で力つき、もう動くこともできませんでした。

そんな娘に話しかける一人の男がおりました。
「おやおや、こんなところでどうかしましたか、お嬢さん」

「わたしは道に迷ってしまいました、もうどうすることも出来ません」
「それはそれは可哀そうに。だったら、夜が来る前に、こっちの方へとを真っ直ぐお行きなさい。――そうすれば道がある。その道を同じ方向へと真っ直ぐ辿れば、すぐにも町にでれるから」
男はそれだけいうと立ち去りました。
「ありがとう」
白い娘は言葉に従い、わずかな気力を振り絞ってその方向へとゆきました。
その先には、男の言うとおりに道がありました。
白い娘はその道を真っ直ぐにゆきました。
歩けど、歩けど町は現れません。
どこまで行っても深い森。
小高い山に囲まれて、道もどんどん細くなるばかり。
白い娘は心細くなって、とうとうその道を引き返しました。
引き返してしばらく歩くと、すぐ近くには小さな町がありました。
食べ物を恵んでもらえないかしら。
白い娘は明りの灯る家のほうへと進みます。
家の中からは楽しそうで自慢げな、声が響いてきます。白い娘はその声にそっと耳を傾けてみました。
「町の近くに気味の悪い化け物がいたんだよ。この世のものとは思えない真っ白でおぞましい化け物さ。けれど、俺は勇気を出して追い払ってやたんだ――」
その声は白い娘に語りかけ、道を教えたあの男のものでした。
わたしはちがう。
ばけものじゃない。
哀しみに暮れ、白い娘はそっと町を後にしました。
近くに川をみつけて水をのみ、野草を食べて、お腹の減りをがま

んしました。

それでも白い娘はくじけずに、旅を続けます。

次に白い娘は大きな街に辿りつきました。

こっそりと、お金を置いて食べ物を貰おう。

白い娘は、抜き足、差し足、忍び足。静かにお店に近づきました。

「おやおや、そんなに怯えてなにかあったのかい」

店主が白い娘へと話しかけました。白い娘は小さくなって震えるばかり。

けれども、店主は白い娘を怖がりもせず、にこやかに話しかけます。

「……いじめない？」

その店主は「ああ、もちろん」と、白い娘に微笑みかけます。

白い娘はとても嬉しくなりました。この店主は白い娘を怖がることはなかったのです。

そして、その店主は白い娘に美味しいご飯と小さな納屋を恵んでくれました。

白い娘はとても喜びました。

この街の人々は白い娘を怖がることはなかったのです。

白い娘が街の人に尋ねると、いろんな人が魔法使いについて語ってくれました。

――けれど、それらは全て騙りでした。

虚栄心のため。富を得るため。少女の心を掴むため。嘲りのため。なんとなく。

さまざまな人間が白い娘を欺きました。

そして最後は情報料に場所代と言って、白い娘の残り少ない財産は全て奪いつくされてしまいました。

「力がなくても、金がなくても、こうやって、生きていくことは出来るのさ」

店主は笑って白い娘を蹴り出しました。
縋りついてみても、あの優しい笑顔は見る影もなく、店主は白い娘を蹴りつけます。
白い娘はまぶたを腫らして泣き濡れました。

お金もなく。
力もなく。
ゆくあてもなく。
白い娘は暗い夜道を、
ただただ歩き続けました。
どうすれば、騙されずに済むのだろう。
どうすれば、本当のことを教えて貰えるのだろう。
でも、あの店主みたいにはなりたくない。

「どうしましたか、お嬢さん」そんな娘に話しかける一人の男。
白い娘は怯えました。
ただただ小さく震えていました。
また、人に騙されるのが、とてもとても、怖かったのです。
「なにも答えてくれないんじゃ、しかたない。これでも食べて、元気を出しな」
男は娘の前に一斤のパンを置いて立ち去りました。

――ああ。
あのひとは、本当に親切な方だったの……
おそるおそるパンを口にすると、そのパンはとてもいい味がしました。
お腹のすいていた白い娘は、それを一気に全部食べてしまいました。
そして、のち。
白い娘は涙を流して謝りました。

ごめんなさい。
ごめんなさい。
怖がったりしてごめんなさい。

――ああ。
もしも、わたしが強ければ。
あの人を信じることも出来ただろうのに――
わたしはとても弱いから――人を信じることすらできない。

白い娘は力が欲しいと嘆きました。
強くなれば何でも手に入る。
それがこの国のきまり。
もし、自分に力があったなら。
もし、自分がもっと強ければ。
でも、私は女だ。
小さな子供だ。
大の男に勝てるわけがない。
それはとても残酷な事実でした。
白い娘の瞳から自然と涙が溢れ出しました。
何でこんなに世の中は不公平なのだろう。
どうして私は幸せになれないのだろう。

気づくと白い娘の目の前に、大きな剣がありました。
いつの間にか、その小さな手の中に大きな剣がしっかりと握られていたのです。
その剣は、まるでお伽噺に出てくる勇者が持っているような、とても素晴らしい剣でした。
娘は不思議に思って振るってみました。
重さはほとんど感じません。

手ごたえもあやふやで、まるで幻のようでした。
けれど、その剣は確かに存在していたのです。
剣はいつの間にか消えてしまいました。

これで私も戦える。
白い娘はそう感じました。
戦えば、誰かから魔法使いの事を教えて貰えるかもしれない。
白い娘は、とてもとても喜びました。

それは、寒い冬の日。
白い娘が黒い男と出逢う、一年前の出来事でした。

白い娘の物語（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

草日真と申します。
よろしくお願いします。

もし、ご感想、誤字脱字、気になる点等がございましたら、コメントをよろしくお願いします。
むしろ何もなくてもコメントをお願いします（笑）
もしコメントを残して頂けたなら、とても励みになります。

では、また。

王城の闘技場

魔法使いの少女との出会いからほどなく、シロナとクロードの元に一人の使者が現れた。
あの少女の言うとおり、王の主催する闘技場で戦って欲しいと言う依頼。
シロナは一も二も無くよろこんで了承した。無言でクロードも了承する。
シロナは決意を胸に王宮の闘技場へと訪れた。
クロードもつき従う。

王が主催する闘技場。
その場所は、こともあろうに王城の地下だった。
確かにこの場所ならば、街の者に闘技場の存在を知られることもなく、賭争者を外へ出さずに戦わせることが出来る。
なるほどね。
やっぱり魔法使いの少女の話は本当みたい。
シロナは、また嬉しくなった。
王からの使者の話によると、王宮の闘技場も街の闘技場と同じく、登録しておくと賭争が組まれ、勝つと相手の財産を貰えるという仕組みだそうだ。
街の闘技場と違う点は、この闘技場ではただ戦いに参加するだけでも多額の報酬が貰えるということ。
そのために全財産を賭けて戦う必要はない。
お互いに少ない賭け金で戦い、負けたときのために保険をかけている人間もいるようだ。

闘技場の場所を確認した後。

二人は使者に促されるがままに王城内を進んだ。
そこは離れの一室。
王の使者はここで生活をして下さいとだけ言って、去っていった。
二人を迎えたのは最高級の客室。
最上級の暮らし。
重厚な質感の木材で作られた机。艶やかな光を放つ黒檀の窓枠。
その全てを優美に照らす、芸術的な銀蜀台。しかし、これは仮初の居室。
戦って勝ち残らなければ消えてしまう淡い幻、泡沫の夢。
「とりあえずは、観戦してみてから考えましょう」シロナはクロードに語りかけた。
「そうだな」と、クロードは短く答える。

二人はすぐに地下に降り賭争の場へと向かった。
入口で城兵に、まだ一度もここで戦っていない賭争者には、舞台から遠い観客席しか入れないと、遠い観客席に案内された。
それも当然と言えば当然。値踏み前の人間を最高級の席に座らせるような真似はしないのだろう。
上から見渡す王城の闘技場。
舞台の外形は今まで戦ってきた闘技場とほとんど同じ。
四角い舞台にそれを囲う金網。少し広いかもしれないと感じる程度。
今からここで戦いが始まる。

――赤い柱の傍らに一人の男が現れた。
歓声が上がる。
普通の人間よりも圧倒的に背が高い。しかし、針金のように細い、長身の男。
――青い柱の傍らに一人の娘が現れた。
片目に眼帯を付けている。背の低い隻眼の娘。

周りで語られる前評判によると、二人は今回が初顔合わせ。
二人とも前の戦いで壮絶な死闘を勝ち抜いたつわもので、今回の一戦は、注目の一戦だとのこと。
シロナは食い入るようにして二人を見つめた。
この二人のどちらかと、いつ戦うことになるかも分からないのだから当然だ。

ほどなくして、賭争が始まった。
二人とも舞台の隅から動かない。相手の出方を伺っているのか。
と、そのとき長身の男が前へと進み出る。
突如として、短剣の嵐が舞う。
長身の男が腕を振るうたびに、短剣が生まれて娘の元へと飛ぶ。
――これが長身の男の心術。
一瞬にして発せられた無数の短剣は、宙を舞い隻眼の娘へと収束してゆく。
隻眼の娘は微動だにしない。
しかし、自由自在に小さな髪留めが舞い、それらを全て叩き落とした。
この髪留めが隻眼の娘の心術。
なおも男の腕は止まらない。連続して短剣の嵐を繰り出し続ける。
その短剣は不規則に運動しているように見えて、その実ある規則性が存在した。
長身の男から、細い糸が伸びている。そして、その一本一本が短剣へと繋がっていた。
故に攻撃は、ほぼ前方からしか来ない。
だからこそ娘は、嵐のような怒涛の攻撃を、たった一つの髪留めで受けきれる。
短剣が背後に逸れることのないように娘は全て前方へ弾き返す。
シロナは二人の心術を考察する。二人とも、比較的近距離型の心術。

心術はその性質上、術者と心術の距離が、近ければ近いほどに威力を増すようだ。
そのことを、経験で知ってだろう。
長身の男は短剣を飛ばしながら徐々に前進して行く。
作戦としては至極当然。
隻眼の娘は防戦一方。このまま攻撃し続ければ、きっと長身の男の勝ち。
長身の男は連続して短剣を放ち、隻眼の娘はそれを弾き飛ばす。
弾き飛ばされた短剣は地に落ちて消え、金網に刺さり長身の男を傷つけるには至らない。
――が、弾き返されても弾き返されても、長身の男は術を撃ち続ける。
長身の男に有利なはずの攻防。

しかし、様子がおかしい。
長身の男がピタリとその歩みを止めた。
隻眼の娘が反撃に出たのだ。
娘の周りで髪留めが凄まじい速さで飛び動き、短剣が娘の元へと辿り着く寸前で、長身男の繰る糸をつぎつぎと切断していく。
そして、髪留めが糸を切断する度にその先端の短剣も消滅した。
それは一つの法則を示していた。
――本体から切り離された心術は消滅する。
攻撃を破られ、長身の男が小さく呻いた。
心術を破壊された衝撃に、心を蝕まれたのだ。

しかし、隻眼の娘にそのような芸当ができたのなら、彼女は何故もっと早くに反撃に移らなかったのだろうか。
それはきっと攻撃範囲の違いによるもの。近づけば確かに、心術の威力は上がる。だが、威力の上がり方には個人差がある。
隻眼の娘の方が、より近距離戦に向いていたということ。それに、

男が糸のようなもので短剣を操っているという性質。至近距離ではその攻撃範囲、攻撃の角度が狭まってしまう。
意図的に娘の後方へ短剣を投げ、引き戻す動きで攻撃を狙うも、引き戻す動きは特徴的で遅すぎる。
その所為で正面の短剣の何本かはかき消され、引き戻す短剣も事なく処理される。
少女は前に出ない。
ただ、その場で受け続けるのみ。
シロナは、ここに至ってようやく隻眼の娘の意図を察した。
なるほど。わかった。
隻眼の娘の狙いは持久戦。
じわじわと長身の男の攻め手を奪い、力尽きた所でゆっくりと対処する作戦。
守るべき範囲の狭い娘自身の小さな身体。
至近距離で心術を操る分には、ほとんど消耗しないという事実。
心術をかき消せば敵に心的痛手を負わせられると言う事実。
さらに髪留めを高速で正確に動かせるという娘の心術の特性が、彼女にその戦法を取らせている。
男は短剣を操る為に常に両腕を動かしている。
腕を振るい続けている。
体力的な限界が先に男に降りかかるのは自明の理。
娘の意図に気付いたのか、長身の男は後ろに跳び退り、距離を取った。
長身の男が攻撃しないかぎり、隻眼の娘は長身の男に攻撃する術を持たない。
そう判断しての行動。
しかし、その判断も隻眼の娘は見抜いていた。想定していた。
娘も合わせて前方へ、じりじりと移動する。
娘は確実に長身の男を追い詰めていた。
ここは闘技台の上。

逃げ場はない。
後ろに下がれば金網がある。
今までの攻防で、隻眼の娘は感じていた。
至近距離に接近しさえすれば、自分の方が有利。
勝てる。
娘の心にはその思いがあった。
だからこそ、長身の男をゆっくりと追いかけた。
追い詰めた。
長身の男の背後には、金網。
もう下がることはできない。

娘が勝利を意識したその瞬間。
――彼女の背に短剣が突き刺さった。
崩れ落ちる娘。
祈りを捧げる男。
その賭争が終わった。
舞台の上に拍手と歓声が降り注ぐ。
舞台の外で見ていたシロナすら呑まれていた。
その短剣がどこから飛んできたのか一瞬気付けなかった。

長身の男が娘に挑んだ攻防。
娘が持久戦を挑む為の攻防。
その最中に弾き飛ばされた一本の短剣。
とうにかき消されたと思っていた短剣。
それが、闘技場の金網に突き刺さったまま残っていたのだ。
短剣に伸ばした糸が見つからぬように、長く伸ばした糸、極限まで細くした糸による芸当。
男は最初の攻防で糸の長さを、攻撃範囲を誤認させることで――
――短剣の糸を太く一定にすることで、娘に思いこませた。短剣の射程はここまでだと。繋がる糸を追えば十分だと。

それはまるで一本の釣り針のよう。
そしてその上で、持久戦を嫌い後退したかのように見せかけての移動。
しかしそれは、甘い餌。追いかけて前に出る娘。相対的に娘よりも短剣の位置の方が後ろになる。短剣がひっそりと、娘の死角に回り込む。
後は、娘に気づかれないように男が短剣へ伸びた糸を引き。
それで、幕引き。
不意打ちによる心理的ダメージは計り知れない。
欺かれた衝撃と共に、隻眼の娘は崩れ落ちた。
凄まじい駆け引きだった。
シロナは震えが止まらなかった。
自分も、隻眼の娘と同じ状況ならば、彼女と同じ戦略を取っていただろう。
そして、この賭争は結果をみるよりも接戦だった。
もし、彼女が金網に刺さった短剣に気づいていたら、裏に延ばされた糸に気づいていたら、男が糸を引く動作に気づいていたら――結果はまた変わっていたであろう。
この勝負において隻眼の娘のとった戦術――持久戦が、この上なく正しい戦法であるのは紛れもない事実なのだ。
紙一重の演技。
糸の上での綱渡り。
そしてそれを長身の男は見事に渡りきった。
――街の賭争者とは圧倒的に格が違う。
その戦いを目の当たりにした後。
シロナは胸中で秘かに思った。
今までの戦術では全く通用しないかもしれない――――

心術、型、戦略

その後。
何人かの賭争を見て、シロナは思った。
皆が皆、一対一で戦う賭争者。しかし一目で一騎当千の猛者とわかる。
街の賭争者とは比べ物にならないほどに、圧倒的に強い。強力な心術で敵をねじ伏せている。
効果範囲が、発動の速さが、術の精度が、今までの敵とは圧倒的に違う。
徹底的に己の技術を磨き上げている賭争者ばかり。
その上で、戦略を練り、自分の土俵に引きずり込んで戦うエキスパートばかり。
分類するとなるなら基本的には攻守のつり合いの取れた近接タイプの賭争者が多い。
傾向を分析して、勝つ術を考える必要がある。
シロナは周囲を注意深く見渡す――
今のところ見たことのある相手は今のところ一人もいない。
――一筋縄ではいかないようだ。

闘技場の案内人の話によると、最初の賭争は相手の素性を知らぬもの同士。
この闘技場で初めて戦う者同士の戦いと決まっているとのこと。
そして、賭けるものはお互いの全て。
未知数の新人が全てを賭けて戦うからこそ面白いと、案内人は語った。
その戦いに勝利すると、晴れて正式に王の客人となる。
それで初めて王が座るのと同じ座席、一番下の観客席へと入ることが出来るようになる。

シロナは瞳に力を灯して決意する。
王の印章を奪う為には、魔法使いの少女に願いを叶えて貰うには、私の望みを叶える為には――この戦い、絶対に勝たねばならない。
いや、絶対に勝つ。

――――

夜。
シロナは自室にて、今日見聞きしたことを思い返していた。
私達はこれから、未知の相手と戦わなければならない。確かに相手の戦術を見極めてからの戦闘では勝手が違うだろう。一方がもう一方の戦術を知り、もう一方は知らないという不公平をなくすための行為らしいが、難儀な話だ。事前の情報収集も賭争者の技量であるはずなのに。
――だが、こちらにはクロードがいる。
彼がいる以上、心術使いに負ける気がしないのもまた事実。
いざとなったら、彼に敵を押さえこんで貰えばいいのだ。
それでほとんど全ての敵は完封できる。
クロードの纏う黒い球からはみ出した敵を私が狙い撃ちにすればいい。
しかし、それもある種、賭け。
敵の賭争者の力が――腕力が、クロードよりも弱ければの話。
先ほど見た、長身の男のような敵と当たった場合、クロードでは敵を組み伏せることは出来ない。
やはり、クロードに対して攻撃が効かないことに動揺して、心術の精度を下げて貰うしかない。
心術は心の力。
相手に戸惑いが生まれれば、大きくその力を失う。
シロナは今まで、その効果を有効に利用して戦ってきた。
――何にせよ、勝つしかない。

次の戦いが最初にして最大の難関。この戦いに勝利しないことには、王に近づく事すらも出来ない。
シロナは小さくため息をついた。
街の闘技場のように上手くはいかないものね。

勝つためには敵となる賭争者たちの傾向を分析し研究することが肝要。
未知の敵と戦うにあたって、シロナは基本に立ち返り、現在の段階で一般的に知られている心術の基本的な性質を、一つ一つ意識しながら思い出すことにした。
先ず、大きな前提として心術は心に作用する術である。
これは多くの心術を観察した結果から判明した、前提として採用していい程の純然たる事実。現状において、例外はない。
心術の力はとても大きい。
無防備な人間が、害意のある強力な心術を受ければ、それだけで廃人になる可能性すらある。
心術使いは、攻撃を意識していれば、敵の心術に対して若干の耐性があるが、力の籠った心術を受ければ、それだけで昏倒することもある。
そして、発動している心術が破壊されれば、術者に相応のダメージが返る。
籠められた想いが強ければ強いほど、頑丈な破壊されにくい術となる。
しかし、破壊されたときの反動もまた大きい。
心術を術者の意思で解除した場合には、その反動はない。
けれど、心術は解除するには、籠められた想いに比例して時間がかかる。

これらが心術の性質。
――心術使いの間で、常識として広まっている経験則。

そして、次に思い返すのは、心術使いの間に存在する戦法の共通点。
一般的な心術使いは自らの術を小出しにしない。
全身全霊の一撃を持って叩き伏せるほうが未知の敵と戦う上で効果的。
心の力の総量が勝っているほうが勝つという、いたってシンプルな戦いに持ちこむ。
それが、多くの賭争者の選択する戦術。
それゆえに、心術使いは術の解除を行わない。
強い想いの籠められた術を解除するときに生じる隙が大きすぎるからだ。

先ずこれらが、全ての心術に共通する理解。
その上でシロナは存在し得る心術の傾向を、近距離型と遠距離型に分類していた。
攻撃距離と攻撃範囲が狭く、威力も低いが小回りの効く近距離型。
攻撃距離と攻撃範囲は広く、威力も高いが発動までに時間のかかる遠距離型。
近距離型の心術は先ほどの隻眼の娘や長身の男、さらにシロナと同じように自らの手に武器を具現化し、至近距離でその威力を発揮するもの。
遠距離型は、過去に見た、宝石を飛ばす豪奢な女。
宝石に力を注ぎ攻撃する型であるが、攻撃の発動までに無防備で、長い時間を必要とする。
そして、重大なのは心術は操る触媒が存在することで威力を増すという事実。
過去に見た、黒髪の女は自らの髪を、豪奢な女は宝石を、隻眼の娘は髪留めを触媒とすることで、より強大な力を得ていた。
心術で生まれたものは術者の身体から切り離せない。

だがもし、触媒があったなら、触媒に力を伝えた後にそれを飛ばす事も出来る。
豪奢な女の宝石がそれだ。
触媒の有無は特に遠距離型の術の精度に大きく影響する。
良い触媒が存在すれば、術の発動までの時間を短くすることができる。
遠距離型の心術使いの場合は、多くの者が何かしらの触媒を用いている。
あの宝石を飛ばす女の場合は、飛ばしているものが、媒介である宝石自身であるために、宝石本体が物理的な威力も持つ。
あの時の女は、宝石に物理的な破壊力ではなく、何か別の力を付加していたためか、宝石に当たっても、クロードはダメージを受けていなかった。
その付加された力がなんであったかは、クロードに打ち消された今となっては、わからない。

――――

ここでひとまず、この分類を用いて街の闘技場の歴史を紐といてみよう。

遥か昔。
街の闘技場は、多くの無頼漢で埋め尽くされていた。
ただただ、拳を振るって野蛮に戦うのみの男たち。
それが心術が生まれる前の時代。
その拳による暴力を、突如として現れた心術使いたちが駆逐した。
その者たちはみな、近距離型の心術使い。その心術使いには拳では、とても敵わない。
殴りかかろうとする前に心術を受けて倒れてしまう。

流れが変わった。
次に、近距離型心術使いが溢れる闘技場。中で行われるのは全力の心術同士のぶつけ合い。心の力の正面からの削り合い。
その者たちに勝つために、より高い威力の術を放てる遠距離型心術使いが生まれた。
けれど、地下闘技場では武器の使用は禁止。
結果として触媒を必要としなくても技術を生かせる、近距離型心術使いの数の方が多いままだった。
それは二対二の方でも長く同じだった。
しかし、あるとき、多くの賭争者の組みの二人ともが近距離型の心術使いであることを利用して、一人が近距離型、もう一人が遠距離型で挑んだ組みが居た。
そして、その組みは火力の差で勝利。
遠距離型の心術使いが術を発動するまでの時間を近距離型の仲間が補う戦術。遠距離型の術が発動すれば、技の威力で多くの場合に押し勝てる。
有効な戦術として、二対二の闘技場では、一人は近距離型、もう一人は遠距離型、という戦術が多く採られるようになった。
この組み合わせがバランスとしては最も優れているだろう。
しかし、このバランスの隙をついて、二人とも遠距離型で賭争に参加し、勝利を収めた組みが現れた。
近距離型は遠距離型に不利だという事実を読み切っての勝利。
しかしこの、二人ともが遠距離型という戦法は主流には至らなかった。
あまりにもリスクが大きすぎる。
近距離型、遠距離型　対　遠距離型二人。
この戦いの場合、近距離型の味方の遠距離型が捨て身で近距離型の為に道を作り、敵の遠距離型二人の攻撃を受けきれば、多少不利ではあるものの、近距離型と遠距離型の組みの勝利もありえる。
それに、心術を発動するまでの時間を稼いでくれる人間がいるの

といないのでは安心感が大きく違う。
精神の安定は術の発動時間にも大きく関係する。
――さらに言うならば、心術使いたちは恐れていたのだ。
狭く囲われた闘技場。
その限定された空間の中でなら、体術で戦うものならば、遠距離型の心術使いに勝ちうるかもしれない。
発動までに時間のかかる心術。
その隙をつき、一瞬にして間合いを詰めて物理的に攻撃されたなら――屈強な肉体を持たない、心術使いでは敵わないだろう。
普通の心術使いではその戦法は使えない。
いや、どんな人間でも、きっとギリギリで実行は不可能。
けれど、ともすると不可能を可能にする程の速さを持つ、圧倒的な体術使いが存在するかもしれない。
そうなったなら、闘技場で、また血を流す殴り合いが始まってしまう。
体術使いに復権を許すことを恐れて、街の闘技場では近距離型と遠距離型の組みが主流だった。

街の闘技場へ、シロナとクロードが挑んだときの段階が、ここだった。
近距離の術も遠距離の術も等しく効かないクロード。
しかも、ただ効かないどころか、クロードの持つ黒い空間は心術をかき消す。
強制的に消滅させる。
クロードに対して心術で攻撃したものはみな、その心術を破壊された衝撃を心に受けて倒れていった。
クロードの特性は、その特別な状況下では明らかに最強だった。
それを利用して勝利を引き寄せるシロナ。
ロベリア第三闘技場でシロナたちが負け無しなのも当然だった。
しかし、クロードには明確で決定的な弱点がある。

それは相手の体術に圧倒的に弱いということ。心術を使わない攻撃に対して、彼は無防備。それこそ単純に、敵に殴りかかられるだけでも厳しい。

シロナはそのことを恐れていた。

もし、身体を鍛えた心術使いがいたとすれば、それだけでアウト。シロナが単体性能で勝らない限り、二人に勝ち目はない。

それに、これらの理解は全て経験則。

法則には例外がつきもの。

現在は、まだ心術が生まれてから未だに片手で数えられる年月しか経っていない黎明期。

心術の正体も心術による現象も、その特性も未だに理解が進んではいない。

クロードの特性も、心術に対する理解も、シロナの独自解釈によるものに過ぎない。

以降に、どんな例外が現れるかもわからない。

始めて見たからわからないなどという、事態は許されない。

想定外は排さなければならない。

クロードの力は、正にその黎明期であるが故の不安を煽る力となっていた。

誰も見たことのない未知の力に恐怖するのは至極当然。

現状では勝負の結果は全て戦闘の前に、相性によって決まる。

シロナとクロードの組みは、そんな脆さを持っていた。

しかし、シロナは引くつもりはない。

それもそのはず。

もし、普通の心術使いが相手なら、負ける可能性は限りなく低いのだから。

この王城の闘技場も、街の闘技場と賭争者の型は大きくは違わない。

見る限りでは、心術に頼った術者ばかり。

――公算は大きい。
一度も勝っていない新人は、王と同じ舞台には立てない。
王の傍へと近寄ることも出来ない。王から印章を掠め盗ることも出来ない。
だったら、勝って王の傍に行くだけだ。

翌日。
シロナとクロードは王の闘技場へと申し込みを済ませた。
二人で一人の扱いは受けられるようだ。
むしろそもそもが、二人で一人として城に呼ばれたようだった。
二人は城兵から近日中に対戦が組まれるので、城の中で待機しているように、と伝えられた。
王城。二人に与えられた豪奢な客室。
「ねぇ、クロード」
「ああ」
「いつの間にか、あなたを覆う黒い塊の色が、濃くなってない？」
少し前から感じていた疑問。シロナは思いきってクロードに聞いてみることにした。
「そうか。俺には分からないな」クロードは淡々と答えた。
事実、クロードは気づいていない。
中にいるものには、その闇が徐々に濃くなろうとも気づかない。
――人は自らの髪が、日に日に長く伸びていくことを意識しないのと同じように。彼は自らの闇の認識出来ない。
「そうよ。だって、こんなに黒いもの！」
シロナはクロードの正面に立ち、手をその黒い塊の奥へとかざしてみる。
窓から太陽の光が射している、明るい部屋であるにも係わらず、かざしたその手が暗く見えるほどにクロードの闇は深くなっていた。

「……それが、問題あるのか？」
クロードはまるで何事もないかのように淡々と聞いた。
「問題って……」
シロナは少し考える。……言われてみると確かに問題はない。
今も、クロードは対心術において無敵のまま。確かに、私にとってはクロードの闇が濃くなろうとも何の実害も無い。彼が心術に対して無敵であるかぎりは……私は自分の願いを叶えることが出来る。
シロナは確かめるように、大して力を籠めずに大剣を創りだし、クロードへと振り下ろした。やっぱり、大剣は黒い塊に触れると共に消滅する。
弱い心術が、かき消されたことにより、軽くぞっとする感覚がシロナを襲う。
確かに問題ない。
クロードを覆う黒い塊はクロードの全身を包んでいる。
その黒い球から、クロードの身体が外に出ることはない。
シロナはクロードの腕を掴んで引っ張った。
クロードが思いきり身体を伸ばすと、その塊の半径が大きくなる。
つまり、両手を思いきり上に伸ばすと、その分だけ身体を覆う為に必要な半径が大きくなるので必然黒い球が大きくなり、足の先から手の指先を直径とする球が出来る。
この状態のとき、もっとも球の体積が多くなる。
これを上手く使わない手はない。

シロナの思考はいつの間にか次の対戦へと向けられていた。
最も良い奇襲戦法はなんだろうか。
心術の全く効かないクロードの存在だけでも十二分に衝撃的ではあるだろうが、慎重な敵を相手にそれだけでは不足だろう。
相手に最強の心術を出させて、クロードの能力でそれを霧散させる。
最強の心術をかき消して、その反動によって敵を倒す。

現状それが最も危険が少なく、効率のよい勝ち手段だろう。
力の籠った心術を破壊されると、術者の心にもより大きな痛手が残る。

他にも勝つ手段は考えられないかと、シロナは自分の能力を再確認してみた。
大剣の心術。最大半径は１１m前後。巨大化、縮小化が可能。しかし、大剣の一部分だけの大きさを変えることは出来ない。
柄の部分が大きくなりすぎると持ち辛いので、普段は扱いやすい大きさで維持している。
その大きさは柄の太さから約５m。人体を斬りつけると、斬られた相手は倒れる。
当たった手ごたえこそあるが、切った相手に傷はつかない。
苦悶の表情を浮かべて倒れる。
掠ったときには、相手は表情を歪める。
他の者の心術に攻撃されたときと同じように、もし触れたなら、ぞくりとした寒気と共に、世界の不吉に触れて倒れるのだろう。
何も考えなければ、全ての物質を透過する剣となるが、意識さえすれば、地面に突き刺すことも出来る。
体から離れると消えてしまう。
重さは感じない。故に本物の剣ではありえないほどの速さで振ることが可能。
しかし、剣を手に持って戦うがために、攻撃のために腕を振る必要がある。
なので敵が、前に見た隻眼の娘のような心術使いであり、持久戦を挑まれた場合は攻撃を続けてはならない。
体力的に不利になってしまう。
あの戦いを見ていなければ、そんな自分の弱点には到底気付けなかった。
持久戦を挑まれないようにする為の作戦が必要。

そして、持久戦を挑まれた時の心構えが必要。

最善の策は何か？

敵に、クロードを無視されて、延々と私へと攻撃を受け続けられるのが一番厳しい。

なら、やはり、クロードに全面に出て貰う。

そして、相手がひるんだところを大剣で攻撃。

もし相手がひるまなくても、大剣で攻撃。

そのまま勝ちを狙う。

単純だが一番確実性の高い作戦。

相手が近距離型だろうが、遠距離型だろうが同じ方法で対処できるのが強み。

相手を見切る時間が不要というのは、お互いに初対面での戦いではかなり有利に働くだろう。

こちらから動くということは、隙を生み相手に迎撃されるという危険を孕む。

しかし、クロードには心術は効かない。

危険を最大限に減らしてくれるスキルがある。

――大丈夫。

きっと勝てる。

いや、絶対に勝てる。

シロナは何度も自分に言い聞かせた。

二人の対戦が決まったのはその翌日。

さらにその次の日に対戦ということだった。

街の闘技場とは違う、随分とのんびりな戦いの日程が決まるペース。

それだけ敵賭争者が少ないのか、それとも多すぎるのか。

城の地下闘技場での様子を見る限り、それはおそらく後者だった。

城の地下では連日連夜、賭争が行われていた。

ここでは、全てを賭けて戦う必要はない。ただ、戦うだけで大金を得られる。
そのために、何も賭けずに何度も戦う人間が存在する。
なので、戦える人間は多いはずだ。

決戦前日。
シロナは翌日までゆっくりと休息し、戦略を練ることにした。
クロードは何の心配もないといった悠然とした様子で、ずっと窓辺の安楽椅子に腰かけ外を見ている。
シロナは無言で思案に耽る。
そう明日こそが、運命の分岐点。
明日を乗り越えさえすれば目的に大きく近づける――

心術、型、戦略（後書き）

どうでしたか？

設定の出し方がとても難しいです……

うまく書けてるのかなぁ……

ご意見、ご感想、疑問点、矛盾点などがあったなら、コメントを下さい。

お待ちしています。

異形の怪人

過剰な程までに豪奢な地下への階段をシロナとクロードは二人進んだ。

今日の賭争。

シロナの立てた作戦は、クロードが正面から敵に接近し、敵の目前に立つことで相手の心術による攻撃を完封するというもの。

掴みかかられない程度の距離を保って、クロードに敵の心術を打ち消してもらう。

敵が近距離型の場合なら、攻撃範囲が狭いはずなので、その攻撃は全てクロードにさせる。その隙にシロナが攻撃する。

敵がもしも遠距離型なら、発動前の隙を突いてクロードが敵に接近して、そのまま完封を狙う。

初めてクロードの行動に頼りきった作戦。だが、シロナにとっては、考え得る最高の手だった。

それはある種の賭け。クロードを敵に接近させるということは、それ即ちクロードが敵から物理的な攻撃を受ける恐れがあるということ。

もし、相手が屈強な大男で近寄ってきたクロードに殴りかかってきたとしたなら、恐らくその場でクロードは戦闘不能。

この戦術が有効に働けば、ほとんどクロード一人でも勝ちを拾えるが、もし最悪の事態が起こったとするならば、シロナ一人で敵を相手にしなければならない。

相手が殴りつけてきそうな、粗暴で屈強な男であった場合は即座に作戦を変更しなければならない。

もし、クロードの接近で決着がつかなければ……。

シロナは決死の攻撃に出て、相打ちになってでも敵を沈めるつもりでいた。

単純に二対一であるという事実を有効に活用すればいい。

もし私が倒れたとしても、敵と相打ちであるならクロードが残っているので、私たちの勝利だ。
そもそもが、圧倒的に有利な戦い。
大丈夫。
シロナは自分の胸に言い聞かせた。

そうして運命の賭争が始まる。
舞台に上がるのは青側の柱。
二人は促されるまま、舞台に登った。
正方形の闘技台の隅。
対となる柱。そのもう一方。赤い側には既に敵がいた。
異形の怪人。
ひょろりと腕だけ異様に長い奇妙で歪んだその体躯。口は深く裂け、歯は鋭く尖り、目には赤い目隠しをしている。その服は黒と赤と白の包帯のような布を、体中に巻きつけただけのような始末。
シロナはその姿を見ただけで、気持ち悪い。と思った。しかし、それこそが敵の目的。
シロナは事前に、敵が対戦相手をひるませる事を目的とした出で立ちで現れることは想定し、また覚悟していた。この程度ではひるまない。
クロードはそもそも敵の姿など、全く意に介していないよう。

文書が読みあげられて、戦闘が始まる。
――と、同時。
クロードが敵の前へと躍り出た。シロナもクロードの後ろについて前に出る。
対応するかのように、全身の布をクロードへと飛ばす怪人。
作戦通り。
うねり動くその布はクロードへと絡みつく前に、彼の周囲の黒い空間へと呑まれて地にはらはらと落ちてゆく。

不可思議な力を危険と判断したのか、怪人は後方へと跳び退った。
クロードはなおも前に出る。怪人は後ろに下がる。
そして、クロードは拳を――振り上げた。
ただ、上へと。

黒い塊が広がる。支配域が増大する。
突然のことに、さらに警戒を強めて後ろに引く怪人。
怪人の、そのすぐ後ろには既に金網がある。もうこれ以上クロードから距離を取ることは出来ない。完全にシロナの手のひらの上での出来事。

想定通り。
シロナは、流れを掌握したと確信した。そして、自らも前へと進み出て大剣を作り出し、その大剣を左から怪人へと薙いだ。当然、シロナの目の前にはクロードがいる。
大剣はクロードの黒い塊に触れた個所が消滅してしまう。
だがそれもシロナの思惑の内。
これは怪人が逃げた瞬間に迎撃するための先置き攻撃。
この怪人は正体不明のクロードとの接触を極力避けるように行動している。
壁際に追い詰められた怪人は、クロードの直進を受けて、左右どちらかに逃げるはず。
その判断を制限する。
全力を込めない攻撃でクロードの黒い塊によって大剣の一部が消えることをも気にせずに、敵に攻撃を見せる為の攻撃。そしてすぐさま全力で、返す刀で右から薙ぐ。
シロナの最初の一撃を見た敵は、残された右に回避するはず。
――そこに、必殺の一撃を叩きこむ。それがシロナの策だった。
シロナの必勝の策だった。
迫る大剣とクロードを見て、怪人は反射的に跳んだ。

並みの人間であるなら、クロードから逃れる為に左右のどちらかに逃げる。
並より強い人間なら、シロナの大剣に気づき、その逆側へと反射的に跳ぶ。
――だが、並より強い人間よりも、遥かに場数を越えてきた、異形の怪人が出した答えはまた違った。

『上空』

それこそが、異形の怪人の出した答え。
ただ――上への跳躍。
そもそも上に跳ぶと言う選択肢を、そもそも持っている人間は少ない。
怪人が並外れた跳躍力の持ち主であるがゆえの選択肢。
だがもしも、怪人が並みより高く跳べる人間でしかなかったなら、彼は反射的に迫る大剣の反対方向へと跳んだことだろう。その方が隙が少ないのだから当然だ。
けれど、怪人は迫る大剣を見た一瞬、その瞬間に考えた。
この攻撃は行動を制限するための攻撃。
選択肢を縛って、本能的に驚異から逃げる方向へ誘導するための策。
ならば、自分は上に逃げる。
敵の意の隙をつくことこそが、戦闘の極意――
相手に不安を抱かせることこそが、勝利への一番の近道。
――これ即ち最善策。相手の動揺を誘い、悠然と二人の行動を観察して黒い男の特性を見極めるのがいい。そう考えての行動だった。
飛び上がって、怪人は両腕を大きく広げて金網にへばりついた。
――凄まじい思考の瞬発力。
シロナが左から薙いだ大剣は空を斬り、返す刀で右から薙いだ攻

撃も空しくクロードに触れて消えた。
怪人は全身に巻きついた細長い布を伸ばして、上方の金網に絡め、上へ上へと移動して行く。
シロナは想定外の出来事に困惑していた。
だが、その事実を顔に出さぬように、怪人の行動を見つめる。
策が抜けられた。それも――実にあっさりと。上へ逃げるという想定外。
けれど、それは前向きに捉えるべきだと思いなおした。戦いの場を、金網の舞台を立体的に使うという怪人の特性。それを把握出来ただけで十分。
怪人は上へ上へと昇った。
そして、金網の上方で自身の身体を宙空に絡みつけた。
これは勝負を振り出しに戻したに過ぎない。怪人はクロードに攻撃する手段を持たない。
危険と判断し、様子見に徹している。
シロナは決断した。
ここで、攻め込む。
この距離なら、届く。
私が倒れたとしても、クロードが倒れなければ――
二人一組一心同体と認識されるのだから、私たちの負けにはならない。
だったら、ここは全力で攻め込むのみ。
もし、私が単体性能で勝るのならば、それでよし。
そうでなくとも最悪の事態は避けられる。
シロナは全力で斬りかかった。
しかし、怪人の取った戦法は、またシロナの予想を裏切るものだった。怪人は、その場からさらに上へと退避した。遥か高く、天井の金網へと。
天井の金網までは１３ｍ。
対して、シロナの通常時の大剣の長さは５ｍ。この高さでは届か

ない。
当然の如くクロードにも手は出せない。
異形の怪人は包帯のような布を金網に絡めることで自らの身体を宙に浮かせている。
分類するとするなら、近距離型。
しかも、包帯を触媒として使い攻撃の間合いを伸ばしているようだ。
シロナの心術性能を知らない者が考えるとするなら、シロナはここから打てる手がないと考えることだろう。

――膠着状態。

この状況を作って怪人は何をしたかった？
シロナは思考を巡らせる。私の攻撃性能を知りたかった？　それもあるかも知れないが、たぶん、それは本来の意図ではない。
怪人は、クロードを恐れている。
攻撃が全く効かない未知の相手。どう戦えばいいのか皆目見当もつかない未知のクロードを警戒している。それが第一のはず。
そして私の心術。付加された能力があるのか、あるとすればなんなのか。
勝つために必要な情報が不足しすぎている。と、判断した上で、異形の怪人は様子見に徹しているはず。
現在の戦闘で私は大剣の大きさを変えてはいない。
現状では、私の攻撃範囲を誤認しているはず。私に攻撃手段がないかもしれないと暫定的に判断しているはず。
だとするなら、異形の怪人は様子見を続けるはず。
事実、黒い塊の男は金網の下から動かない。

シロナは大剣を巨大化させてその勢いのままに斬りつける。
怪人は突如として迫る白刃を、器用に包帯を操って回避した。

シロナはこう思考した。
この均衡は怪人が意図して作ったもの。
クロードの事を観察するための行動。ならば怪人の心理は、後手後手に回った逃げの結果。だったら、ここで攻めきるべきだ。怪人に平常心を与えないように。クロードの恐怖をより大きく植え付けるために。
けれど、異形の怪人は器用に包帯を操ってシロナの攻撃をするすると躱した。シロナは攻撃が当たらないことをみとめると剣を振るうのを止めた。考えを変え、地面に座って、余裕をもって休息する。
もはやこれは持久戦。怪人は、常に包帯で金網天井に張り付くという異常な体勢。
そもそも、維持するだけでも体力を消耗するはず。
――この考え方は、先の戦いを見ていなければ思いつかなかったな。
そう、先の戦いの二人に感謝した。

異形の怪人は動かないはず。
シロナはそう考えた。
だが、異形の怪人はまたしてもシロナの思考を裏切って、赤く垂れる包帯を下へと伸ばした。
その包帯が激しく揺れ動く。
それを攻撃かとシロナが身構える。大剣を作り出し、その包帯を切り捨てる。
いつ、なんどき、怪人の攻撃が降ってくるかもわからない恐怖。
その想像を絶するプレッシャーの中で、シロナは耐えていた。
そんな様子など、微塵も感じさせないように、悠々と余裕を持って対処しているように立ち振る舞う。
シロナにも解っていた。それこそが怪人の策。疑心暗鬼に陥らせ消耗させることこそが、怪人の作戦。
だが、ついついつられて反応してしまう。

怪人が垂らした包帯を小さく細かく動かすだけで、何らかの攻撃を想定してしまう。
怪人の攻撃手段が布なのだとしたら、こっそりその布をほどいて、金網を伝わせていないかとすら神経を払う。
徐々にしかし着実にシロナは消耗していた。
だが、それは怪人も同じはず。
怪人自身も確かに消耗している。徐々に息が乱れている。
金網の上方に絡みつき、常に敵の攻撃を避けられる体勢を維持し、クロードを常に警戒しなければならないという状況は、じっとりと、怪人の体力と精神力を削り取っているはずだ。
怪人の垂らす包帯に対してシロナも間を置き、隙をついて怪人を迎撃する。
大剣を限界まで巨大化させて、怪人をつき貫く。

――一定の『遅さ』を保って。

それは先の戦いで学んだ、怪人に自らの心術性能を誤認させるための策。
自身の心術拡大化に要する時間を本来のそれよりも長くかかると誤認させ油断の隙を突く。そのためには、もっと徹底的に演技を怪人に観察させなければならない。異形の怪人が完全に誤認するまで。
するすると避け、天井から布を垂らす怪人。その布を振り払いつつ、種を捲くシロナ。
水面下での戦い。
展開になんの変化もない勝負に焦れた観客がざわめき始める。
数時間の時が経過した。
シロナは近寄って来た布を大きく薙ぎ払う。
怪人はシロナの大剣に布を切られないように小器用に操る。
飛び跳ねる布。
その動きを追うように、シロナは大剣を振り上げる。

と、同時。
シロナは最速で大剣を巨大化。
怪人の隙をついて刺突を繰り出した。
不意の攻撃に動揺する怪人。

最高のタイミング。

怪人の移動速度ではこの攻撃は避けきれない。
シロナは勝利を意識した。
だがしかし、怪人は今までの動きからは想像すらできない圧倒的な速力でシロナの刺突を回避した。怪人もまた力を隠し持っていた。
けれども、その速力を解放したということは怪人はそれほどまでに追い詰められていたということ。シロナは尚も追撃する。
心術の大剣を地面に刺して巨大化させることで、自らの体を宙へと浮き上がらせる。

異形の怪人は瞬時にこれを好機と判断して迎撃する。
何故ならば敵の心術は地面にしっかりと刺さっているのだ。
矛を持たない敵など相手にはならない。解除する暇はない。そう判断しての攻撃だ。
シロナは中空で自らの心術を一旦消して、また新しい大剣を創り直すことで迎撃の布を切り落とした。敵の媒体を短くすることに成功した。布は宙を舞って壁際天井に引っかかる。
シロナは勢いをそのままに怪人へと斬りかかった。

意外の攻撃に、怪人は布を壁へと飛ばして自らの体を手繰り寄せるように回避する。
怪人にとってはシロナの心術の解除速度こそが想定外。
――心術は解除するにも時間がかかる。

にも係わらず、シロナは中空で一瞬の内に解除した。
それは目に見えている以上に手数を増やせるということ。もしも、攻撃の瞬間に術を消し再度攻撃が出来るとするなら、その手数は今の倍以上となるはず。
怪人は推論し、より警戒を強めねばと、シロナを睨む。

この怪人の推論は半分は正解で半分は間違っていた。
シロナの心術解除の速さはごく一般的な範疇。普通の心術使いよりは少し速いかもと言った程度。ただ、心術の解除速度は籠められている心の力――思いの力に比例する。
多くの力の籠った心術を繰り出すと、相手に心術を破壊されにくくなる上に、破壊力も増す。けれど、破壊されたときのリスクは大きくなるし、その解除にも時間がかかる。
普通の心術使いは自らの術を小出しにしない。
全身全霊の一撃を持って叩き伏せるほうが未知の敵と戦う上で効果的だからだ。
弱い術を発動すれば敵に痛手を与えることなく掻き消されて、こちらが消耗するのは必至。
単純に全力で心の力の総量が勝っているほうが勝つという、いたってシンプルな戦いに持ちこむ。それが、多くの賭争者の選択する戦術。それゆえに、心術使いは術の解除を行わない。全力の術を解除するには隙が大きすぎる。
だが、今回シロナが放った心術は違った。それは敵を昏倒させることが目的ではない。
自らが移動するためだけの術。
質量を移動させるために、普段とは違った力の込め方となるように工夫した術。
発動も解除も攻撃の為の心術よりも圧倒的に速く済む。
この攻防はシロナ有利の攻防となっただろう。
事実、異形の怪人は自らの媒介である包帯を一部、斬り落とされ

た。
舞台の金網に白い布が垂れ下がっている。これで怪人の攻撃範囲は狭まるはず。
けれど、同時にシロナは決め手と成り得る策を二つ無くしていた。
シロナの攻撃を回避した怪人も壁に張り付いたまま動かない。
この瞬間、シロナと怪人の思考が一致した。
相手はまだ、何かを隠しているかもしれない。
自ら動くには危険が高すぎる。
二人の賭争者はより警戒を高めて様子見に徹する。
シロナの額にじっとりとした汗が流れ落ちた。

それからまた、数時間の時が経過した。もう観客はほどんどいなくなっていた。
そこで戦いに変化を与えたのはシロナだった。金網際を堂々と歩いて、動かない黒い塊の元へと向かう。気づいたクロードもシロナの方へと向かった。
その動きを見た怪人は凄まじい速さで縦横無尽に跳び回り、シロナの背後を取る。
シロナは怪人の動きに対応し、己の背を金網に預けた。
正面からの攻撃ならば、捉えられる。そう判断しての行動。
攻撃を受けるシロナの元へとクロードが駆け寄る。
異形の怪人は包帯をジグザグに伸ばして、金網を蹴り、舞台中央上空の天井の金網にまで跳んだ。
そしてシロナの正面から己の操る包帯を真っ直ぐに伸ばした。
けれど、距離が足りない。
僅かに届かない。

限界まで後退し金網に身を預けたシロナの元までは、その包帯は届かない。
シロナは判断する。

――これは斬り落とされて短くなった包帯による誤算。
好機。
シロナはその包帯を、右手に作り出した大剣を大きく伸ばして細かく斬り刻んだ。
包帯は散り散りになって舞い落ちる。
しかし、それこそが怪人の策。
怪人は散り散りに舞う布片を心術でつなぎあわせて回避不能の結界を成した。今までの連なった包帯――長さに制限のあるでは媒質ありえなかった、怪人の同時多角攻撃。
シロナの前方を花弁のような心術が包む。
シロナは正面から迫る心術をその手の大剣で間断なく撃ち払う。
同時に迫るように思える布片にもわずかに速さの差がある。
近づいてくる布片を片っ端から撃ち払う。
回避の為に自らの体を金網にぶつけながらも必死になって撃ち払う。
シロナは自らの心術を小回りの効くように小さく変化させ、迫る布片を全て切り落とす。
――現状は不利ではない。
この攻撃を凌ぎきったなら、この怪人も遥かに消耗することだろう。敵の術は徐々に消滅している。徐々に徐々に宙を舞う布の数は目減りしている。
汗が滲み、腕が震える。
限界を越えてもなお、腕を振るう。
そして――
――全ての布が地に落ちた。
媒介を散らし、金網にしがみつく腕力もなくし怪人は天井から落ちた。
だが、その落下の最中。怪人は熟れ割れた柘榴のように赤々とした大きな口をニィ、と開いて嗤った。
シロナは怪人を見据える。大剣を振りかぶり、怪人に斬りかかっ

た。
その腕を背後から迫る、包帯の解れた糸が縛りあげた。
「――えっ」
意外の攻撃に驚くシロナ。
それは先の戦闘でシロナが飛び上がり、中空で斬り落とした包帯。
一度戦いの舞台から――完全に消えたはずの媒介。その布は、シロナの背後の金網高くに引っ掛かったままになっていた。
怪人はシロナに金網を背に戦わせることで――
――シロナが金網にぶつかる衝撃で自らの媒介を戦いの舞台に舞い戻した。
金網で護られ、安全だと判断していた背後へと。
その布へと地に落ちた布を介して、術を伝えて切り口から糸をほどき自ら落下し対象との距離を詰め、渾身の力を込めた心術を発動。
そのままシロナを気絶させた。

シロナの元へと駆け寄るクロード。
怪人はシロナを盾に金網へと逃げる。
そして、残り少ない布でクロードへと攻撃した。
けれど、その布はクロードに触れる前に地に落ちる。
消耗している怪人。息を切らせながら金網に張り付く。
その怪人の方へとクロードが迫る。クロードは怪人の下へと辿り着いた。すぐに赤と白の布に包まれたシロナをその両腕で抱きしめた。
そして怪人はゆっくりと崩れ落ちた。
その金網の天井から――ゆっくりと。
怪人は落ちるさなかに、限界を越えた代償として全身が崩壊へと軋むのを感じていた。
シロナへと放った渾身の心術。解除する暇もなくクロードに打ち

消され、その反動が怪人を襲う。
呪うべきは己の不運。
彼の誤算は解析不能の敵の存在。
如何に素晴らしい観察眼を持っていようとも、如何に凄まじい思考の瞬発力を持ってようとも、対処不能の異例の別格。
彼を待つのは耐え難い絶望。
敗者に希望は存在しない。

異形の怪人（後書き）

いかがでしたでしょうか？
ご意見、ご感想、気になるところ、矛盾点、などがございましたら、
是非教えて下さいませ。

よろしくお願いします。
あと、ついこの間ツイッターを初めてみました。
もしよろしければ、何か話しかけて下さい。
アカウントは
ｋｕｓａｋａ２９
です。

カハラの戦い

シロナは夢を見た。
幼かったころ。
優しく微笑むお父さん。
――そのお父さんが私を罵倒している。
気持ち悪い白い肌だと罵っている。
泣きたくなる。でも泣いちゃ駄目だ。
一度泣いてしまうと、もう戻れなくなってしまう。一度誇りを失うと、もう戦えなくなってしまう。父が町のみんなの中に混ざり、叫び始めた。
自分に向けられる罵詈雑言。謗り。罵倒。蔑み。罵声。嘲笑。それは悪夢のような現実で、何度も逃げ出したくなるような事実だった。
はっと、目を覚ました。
シロナは全身に嫌な汗をかいていた。

そうか。
私は、あの怪人の心術に負けたんだ。
目が覚めてそう悟った。
しかし、起きたその瞬間に結果は勝利だと気づいていた。
視界を埋めるのは高価な木彫りの天井。
既に慣れ始めた目覚めだった。
目覚めた時、シロナは王から貸し与えられた居室のベットで眠っていた。
まだ自分がここにいると言うことは、自分たちは勝ったということ。
何より、あの状況でクロードが負けるなどありえない。
相手は全身全霊をかけて私を攻撃していた。

確実に消耗していた。
クロードに対しても同じ攻撃を仕掛けたなら、心術を消滅させられて術者に多大な負荷が返る。
事実、二人は辛くも勝利を掴んでいた。
シロナはいろんな戦い方があることを学んだ。
心術に媒介を使えることは知っていた。
だが、その媒介自身を操って、自分の身を金網に張り付ける人がいるなど想像すら出来なかった。あの闘技場で立体的に戦う敵がいると想定したことなど、一度たりともなかった。
そして、不意の一撃で完全に意識を刈り取られた。
シロナ一人では勝てなかった敵。完全にクロードのお陰。彼がいなければどうにもならなかった。私たちは力不足ではないかという思いが脳裏を過ぎる。
いや。力不足なのはわたしだ。どう考えても、クロードの特性は最強。
そして、その思いを振りきるように首を振る。
違う。私たちは二人で一つ。クロードの力は私たちの力。そしてクロードが一緒にいるかぎり、私たちが一緒な限り私たちは絶対に負けない。
そう。誰にも、絶対に。
しかし、クロードはこの部屋にいない。

もしかして、弱い私に愛想を尽かして出て行ってしまったのかも……。
「ねぇ、クロード。いないの？」シロナは不安になってクロードの名を呼んだ。
部屋の外の通路から、すぐに彼が現れた。外から帰ってきたらしい。
「もう、無事なのか？」
クロードの静かな言葉にシロナは心の内で胸を撫で下ろした。

大丈夫。この人はきっと、ずっと私の傍に居てくれる。
そんな想いを顔には出さずにシロナは淡々とクロードへと告げた。
「ええ。心術での戦いでは、体は怪我しないし。もう大丈夫」
シロナが心の内を隠す理由。それは小さな不安だった。
もし、私が彼に自分の気持ちを話してしまえば、ともすると彼の黒い塊が消えてしまうかも知れない。あの黒い塊の正体は、きっと彼の孤独。私は彼の孤独を維持しなければならない。
そうしなければ、私は目的を叶えられない。
しかし、その事実を意識する度にシロナの中に嫌な感情が芽生える。

私は本当にこれでいいの？

そんな想いが、かま首をもたげる。その度にシロナは自分に言い聞かせた。
いいに決まってるはず。なにも悪いことはない。
それに、これは私が願いを叶えるまでのこと。もしも私が戻れたら。もしもその日が来たなら。クロードに精一杯のお礼を伝えよう。
その、大きくて温かい手にどれだけ私が救われてきたかと言うことを。ずっと傍に居てくれるクロードがどれだけ心強かったかということを。
もしかするとクロードは白くなくなった私なら、受け止めてくれるかもしれない。
そう。その為に。一刻も早くその日が来るように、頑張ろう。
あの王から印章を奪おう！

二人は闘技場へと降りて、二人の得ることができた資格について聞くことにした。
次に闘うのは王と同じ上の階層。シロナは既に最低限の目的は果たした。

一回戦を突破したことで、王と同じ観客席に腰を下ろす事が出来る。
ここで王の行動について調べ、隙をついて印章を奪う。
それが出来れば、元に戻れる。
幸せな生活が待っている。
次の賭争のリミットは一週間。
それまでに戦わなければ一回戦を突破した権利がはく奪されてしまうらしい。
シロナは、期限ぎりぎりの一週間後に賭争を申し込んだ。
賭争の予約を取るなら早いほうがいい。腹を括るのは早いほうがいい。どうせ戦うことになるのだから。
もしも、賭争を行わずに国王へと不意打ちを仕掛けるとするなら、それが出来るのは次の戦いまでの一週間。今のこの自由な期間。
それまでに、王の現れる時間や行動パターン、癖。何より、印章をどこに持っているのか。知りえる範囲の全ての情報を知ることが必要。万全を期すためには、もう少し情報収集の期間が欲しい。出来ればあと一回は勝利して様子を見たかった。王自身の戦いは未だに見ることが出来ていないのだ。この一週間の内で王が舞台に立つ予定はない。
部屋に帰ってその旨を魔法使いの少女へと宛てて書く。
あの、魔法のペンで机に書くだけ。
そうすると、書き終わって暫くしてから、その文字たちが踊るように浮きあがり、蝶のように舞いながら、窓の外へと出て行った。
よし。これで大丈夫。

また部屋から出て、地下闘技場へ向かう。
今まで入れなかった前列の観客席へと進む。その前列の観客席を見回している守衛が一人。聞くところによると、一戦目を突破した人間の事は全て皆この守衛が覚えているらしい。勝手に忍びこんでいる人がいないか確認しているとのこと。

凄まじい記憶力だ。
シロナはその守衛に王の事を聞いてみた。
「あの人は素晴らしいお方ですよ。常に国の為を思い、国民の指針となるように心掛けて生きていらっしゃる。私は仕事柄、王の戦いは見ることが出来ないのだが、王の戦いの後に出てくる観客はみな口々に王の勇猛果敢ぶりに感激している」といった言葉だった。
他に、客室の管理をしている女中に聞いてみても、王の寛大さと心優しさに救われたという話しばかり。
王城の住民はみな、王のことを心から愛しているようだ。
対して賭争者。
闘技場で観戦している賭争者らしき男に話を聞いてみると、それはそれは悲惨な評判ばかり。虐殺王子の噂から始まり、傍若無人に人を罰して、自らは極力動かない。娯楽の為に人生を注ぎ、国民など搾取するための家畜としか考えていない史上最悪の愚王。
それが賭争者にとっての王。先王を亡くし、若くして後を継がざるをえなくなった王。
真っ赤なマントや真っ青なマントを好む派手好きの王。
聞き込みでわかったのは、王は謎に包まれているということだった。
残虐なのか優しいのか、まるでわからない王。色々な話は聞けたが実質、王の行動原理などは全くわからない。作戦に使えそうな情報がない。
不思議なのは、賭争者たちは王の悪評を語ることを厭わないと言うこと。
もし、本当に残虐の王であるなら、その場で処刑されてもおかしくないことを語っているように思われるのだ。
そうすると、王は良き人？
いろいろと考えたが、シロナはやはりここで思考を止めた。王の善悪など関係ない。
私はただ、王から印章を盗みさえすればいいんだから。むしろ、

自分の行いこそは正義だと信じるほうがいい。
でないと、いざという時に迷いが生じる。

そうこうする間に今日の戦いが始まるようだ。
舞台の上に二人の人間が上がる。
やはりシロナとクロードのように、二人で一人を認められている人間は少ないようだ。
シロナはまだ、自分たち以外の二人組を見たことがない。
これは、好都合。また先の戦闘のように二人であることの有利が、直接勝利に結びつくかもしれない。

赤柱の傍に上がった男は見覚えのある男だった。
背が高いと言う訳でもない。身体が格別大きいと言うわけでもない。特徴的なのは異国風の衣装。髪を結い白い道着という出で立ちだった。それはあの魔法使いの娘と出会った時に居た男。確か名はカハラ。道着は異国の体術使いの象徴。
シロナは彼を見た時から、いやな予感を感じていた。
彼がもし、体術も使える心術使いであるなら、シロナたちに勝ち目はない。
対する青柱側から現れたのは見知らぬ男。茶色いフロックコートに身を包む立派な髭の巨躯。明らかに体力がありそうだ。
囁かれる噂話によると彼らは二戦目以降の賭争者らしい。
王都の闘技場での賭争者は一戦目と二戦目で扱いがまるで違う。二戦目からは、相手を研究し十二分に対策をした後で戦うことが可能なのだ。もしかすると、この二人と戦うことになるかもしれない。シロナは目を皿のようにして二人を見つめた。
出来れば二人ともここで消えて欲しい。
二人とも将来、最悪の敵として私たちの前に立ちはだかりかねない。

ここまで勝ち上がってきたということは、その技量は相当なものはず。
少なくとも彼らは、一回戦は突破した者たち。研鑽をつみ体術の使える心術使いである可能性も、否定は出来ない。
いや――もしかしたらあの道着は相手の心を乱すためのものかもしれない。
どんな心術使いでも、急に殴り合いに持ち込まれるかもしれないと思えば恐怖を覚える。
こういう、相手を困惑させるための格好をすることは、間々あることだ。先の異形の怪人も、自らの異形を心理的優位に立つ為に利用していた。

戦いが始まると同時に、白い道着の男――カハラが仕掛けた。
最短距離を一直線に突き進み、巨躯までの距離を詰める。
すぐさま。
巨躯の手の中に葉巻が現れた。あれが彼の心術。あの大きさなら近距離型の心術だろうか。
カハラはまだ、心術を出さない。そして、カハラは拳を握り、殴った。
――心術は？
観客の間にどよめきが走る。
不意を突かれてか、巨躯の男はそのまま殴り飛ばされた。
シロナにしてもそうだ。相手が心術を使っているにも係わらず、自分は出さないなんて戦術にしても危険すぎる。もし、常人があの葉巻に心術の防御なく触れてしまえば、心的影響は計り知れない。
いや、ともすると、カハラもクロードと同じ……。
シロナの脳裏を嫌な予感が走った。
だとするなら、カハラはシロナたちの最悪の敵。
殴り合いが出来る対心術無敵の存在。闘技場において、この上なく適した存在。体勢を立て直そうとする巨躯にカハラはなおも迫る。

巨躯の男は急いで葉巻を燻らせた。その、葉巻から大量の煙が湧きでる。ふわふわと不定の形で広がる煙。その煙が不気味に渦巻く。あれこそが巨躯の男の本当の心術。

煙を媒介として広域に放つ、近距離型に見せかけた広範囲攻撃が可能な遠距離型。

その煙をカハラは振り払い躱す。腕を振るって、風を巻き起こして吹き飛ばす。

その光景を見てシロナは安堵した。

違う。彼はクロードとは違う。

もしもカハラがクロードと同じ特性の持ち主であるなら、巨躯の噴き出した煙を吹き飛ばす必要なんてない。堂々と歩み出て、ただ殴り飛ばせば済む話。

だったら何故、カハラは心術を使わない？

いや。もしかすると、既にもう使っている？

目には見えない心術が存在する……？

様々な推測がシロナの脳裏を駆け巡る。

カハラの心術が人の目に極端に見えにくいものだとすれば、現状は納得出来る。

彼の心術は既に発動していて、巨躯の男が罠にかかるのを待っている状態だとするなら。

カハラのスタイルがそう言うものであるとするなら。むしろそうでないと理解が出来ない。不定の煙に拳で挑み、煙に触れずに吹き飛ばして勝てる人間などいる訳がない。

シロナはカハラを食い入るように見つめた。どこかにその痕跡はないか目を皿のようにして見つめた。

カハラは尚も愚直に攻める。正面から堂々と。

常人ではありえない程の速さでもって撹乱し、巨躯の男の意識の隙をつく。

それこそ瞬きの瞬間をも狙って蹴る。
風圧によって煙が吹き飛ぶ。当っていないにも係わらず、巨躯の男に苦悶の表情が浮かぶ。
――何故。

今の戦闘は圧倒的に巨躯の男が有利のはずだ。
やはり、カハラから心術の痕跡は微塵も感じられない。だとするならカハラは煙を吹き飛ばす為に、動き続けなければならない。
その身体に煙が触れるとそれだけで勝負は終り。そんな不利な状況下でカハラは戦っているはず。対して巨躯の男は致命傷を受けないようにカハラの拳や蹴りを避け、間合いを取って煙で攻撃すればいいだけ。
その煙がカハラに触れれば、それでほとんど勝ち。
巨躯の男の方が圧倒的に有利なはずの攻防。
しかし、その表情は明らかに異様だった。
歓喜にうち震えるカハラ。拳撃と蹴撃を避けながら逃げまどい、恐怖にうち震える巨躯。
カハラは舞い狂う暴風のように、身体全体を捻って巨躯へと蹴りを叩きつける。
鈍い音。
――空気が凍った。
巨躯の腕が折れている。あの回し蹴りで太い腕が完全に。
折れた腕からは白い骨が肉を突き破って飛び出し、その赤い血液が溢れ滴っていた。
そして、誰かが思い出したように甲高い叫び声を上げる。
それと共に悲鳴が辺りを埋め尽くした。心術の戦いに外傷はない。だからこそ、この闘技場での戦いを見て来た人間にとって、それは衝撃的だった。
ここは街の品の無い闘技場とは違う。上流階級の貴族のためだけの闘技場。

戦いの興奮と、戦術の素晴らしさと、戦果にうち震える人間を見る為の闘技場。
人間の生死が掛った事など実感もせずに観戦する貴族にとって、人の血はあまりに生々しく、そして恐ろしかった。
闘技場観客席から大勢が立ちあがって慌てて逃げ出す。そんな観客席の喧騒を気にも留めずにカハラは、巨躯の懐に潜り込む。
そして拳を突き上げた。
問答無用の一撃。腹部が陥没するほどの衝撃。
巨躯の男は、もう煙を作り出せなくなっていた。小さく呻いて崩れ落ちる。
カハラの完全勝利。
シロナは困惑した。
同時に恐怖した。何故、こんな結果になったのか分からない。
カハラは確かに心術を発動していなかった。

――――――

違う。
認めなければならない。シロナは自分を諌めた。
私はカハラの心術が見えなかった。
巨躯の腕を折ったのは確かにカハラの身体の力、腕力によるものだろう。
だけど、その前。
緊迫した戦いの中で、巨躯の男は恐怖していた。
巨躯の男が恐怖する原因を創りだしたもの。それはきっと、カハラの心術に違いない。
カハラの心術が巨躯の男に先に当たり心理的優位を作り出したに違いない。
そうとしか思えない。
同時にシロナは自分たちの限界も見据えた。

私たちでは、あの化け物には勝てるはずがない。
あの巨躯の男にしたって、たぶん勝てない。

「君は賭争者かい？」
不意に声を掛けられてシロナは慌てて振り向いた。そして反射的に答える。
「はっ、はい」
賭争が終わった闘技場。既に戦っていた二人の姿も無く。まばらに観客が残っているのみ。そんな最中にシロナへと語りかけたのは、シロナよりも頭二つほど背の高い青年。
鮮やかな赤い衣装に身を包む男。それは、噂に聞いた王の出で立ち。
そして何より胸元に親指の先ほどの綺麗で小さな石、首から“あの印章”を提げている。
「いやぁ、年若い乙女がアレを見ても逃げ出さないのが気にかかってね」彼は舞台の上を指差したまま語った。
そこにはまだ、赤黒い血だまりが、飛沫の跡が残っている。
私を賭争者と知っての侮辱だろうか。
少し腹を立ててシロナは毅然と言い返す。
「私がもし負けてしまえば、私も結局は、ああなってしまいますから」それはシロナの覚悟だった。負ければ全てを失うという覚悟。そして、勝てば全てを奪ってしまうという覚悟。凶悪な現実を冷静に受け止めているからこその言葉。
「そうか。賭争者として戦うからには常に命を賭けてるか――君は凄いね。まるで歴戦の古豪のような心構えだ」彼は爽やかに笑った。
シロナには彼が王様にはとてもじゃないけど見えなかった。普通のお洒落な街の男と言われても納得してしまいそうな雰囲気を纏っている。
これが――王なの。

聞いた印象とは随分と違う。
もっと、粗暴で残虐な男だと思っていた。
この王は、私の真っ白な姿を見てもちっとも驚かない。
怖がる気配すらみせない。
真っ白なシロナを見て全く態度に現わさなかった人間など、クロードと魔法使いの少女と、シロナの事を全く見ていなかった、あのカハラだけだというのに。
シロナは少しだけ嬉しくなってしまった。
「王様はどうなのですか？　何故あなたは賭争に挑むのです？」
自然な様子になるように気を配り、シロナは聞いてみた。
不用意な質問。王が真に人道にもとる存在であるのなら、この場で切り捨てられてもおかしくはない質問。しかし、シロナは純粋に興味を持ってしまったのだ。
「質問に答える前に一つ、宜しいかな」
「はい」
「我の事はフェルと呼んでくれ。敬称もいらない。堅苦しいのは苦手なんだ」
王の名はフェル・ラン・ケルス。シロナは言われた通りに従った。
「わかりました。フェル」
「ありがとう」フェルは、はにかんだ。その何処か子供っぽい仕草を見たシロナにはフェルが良き王、良き人に思えた。
「我がどうして賭争に挑むか、だったね。我は、世の為に戦っているんだよ。我が戦わなければ、我が最強だと言うことを証明し続けなければ、臣民が不安に思ってしまうからね。民は力を信じているから。我は民の為に戦う。闘わなければならない。その覚悟が――我を突き動かしているんだ――」一国の王とは思えないほどの気さくな語り口。
――にも係わらず、その言葉はとてもとても重かった。
強い者のもとにつき従いたくなるのは臣民の常。だからこそ、自分は最強の名を護り続けなければならない。

もし、他に最強を名乗る存在が現れ、そしてそのものが確かな力を持っていたとしたら、この国は荒れるだろう。指導者を巡って割れるだろう。
それはきっと平和な世の中ではない。民の平和の為に。心の安らぎの為に自分は戦っているのだと、フェルは静かに語った。

――フェルが去った後。
シロナは自分がどうしたらいいのか分からなくなっていた。
魔法使いの少女の言葉が真実なのか。
それともフェルの言葉が真実なのか。
魔法使いの少女のあの言葉。
『王が、この国を利用しているからです。もし、本当に臣民のことを想っているのだとすれば、どうして賭争法などという、ふざけた法を改めないのでしょうか！』
それはあの子の心の底からの言葉だった。
だけれどフェルは、賭争によって自らの力を誇示し続けることが臣民の心を繋ぎ、ひいては世界の平和の為になると語った。どちらの言葉も真実に思える。
シロナは数刻、迷った。だけど、すぐに結論付けた。
私はフェルから印章を奪う。だって、フェルは私を救ってくれない。国の明暗を分ける決断になるのかもしれない。そんな重大な決定。それでも、シロナは元に戻りたかった。
こんなに白くない。
当たり前に、何処にでもいる娘に。
そうすればそうなればきっと幸せな生活が待っているはずだから。
「クロード、行きましょう」シロナはクロードの腕を引いて立ちあがった。
けれども、クロードは動かない。クロードは何も語らない。
いつの間にか彼の身体は殆ど全てが黒い塊と化していた。

呑みこまれていた。彼自身は黒水晶の中に閉じ込められた人形のように、顔を伏したままピクリとも動かない。シロナは不審に感じて、クロードの顔に触れた。それでも彼は微動だにしない。

「どうしたの？　眠っているの？」

ブラックは答えない。本当に深い眠りについているかのように、動かない。

シロナは彼をベットの上で寝かせてあげようと考えた。今まで自分がここまでこれたのはクロードのお陰なのだから。クロードも疲れていたのだろう。ずっと観客席に座っていたら眠くなるのもわからなくはない。

頑張って持ちあげようとして、手を滑らせてしまった。

クロードがずれ落ちた。

「あっ御免なさい！」

シロナが咄嗟に謝る。それでもクロードは答えない。

ずれた為に、先ほどまでクロードが座っていた椅子が闇の領域から外れた。

――その下には黒い血がべっとりと、こびりついていた。

カハラの戦い（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想、矛盾点、気になったこと。何かございましたら、コメントをよろしくお願いします。

今後ちょっと、更新頻度が落ちるかもしれませんが、ご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5622s/

白と黒の物語

2011年4月26日04時10分発行